

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第70号

巻頭カラー図版 与謝郡岩滝町大風呂南墳墓群出土のガラス釧	白数 真也	
海上で用いられた丸木舟 —浦入遺跡群R地点出土の縄文時代前期の丸木舟—	石井 清司・田代 弘	1
長岡京跡右京第589次・下植野南遺跡の発掘調査	中村 周平	7
—平成10年度発掘調査略報—		11
8. 南谷古墳群C支群	12. 通り谷城跡	
9. 永留城跡(A地点)	13. 今林遺跡第2次	
10. 浅後谷南遺跡(B地区)	14. 菰池遺跡	
11. 墓ノ谷古墳群	15. 大畠遺跡	
資料紹介 恭仁宮跡北面大垣出土「東」銘文字瓦について	永澤 拓志	23
研究ノート 愛宕神社1号墳の中国鏡について	竹井 治雄	27
長岡京跡調査だより・67		31
センターの動向		33
府内報告書等刊行状況一覧		35

1998年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭カラー図版1 与謝郡岩滝町大風呂南墳墓群出土のガラス釧



(1) 1号墓第1主体部出土ガラス釧



(2) 1号墓第1主体部全景

## 図版解説

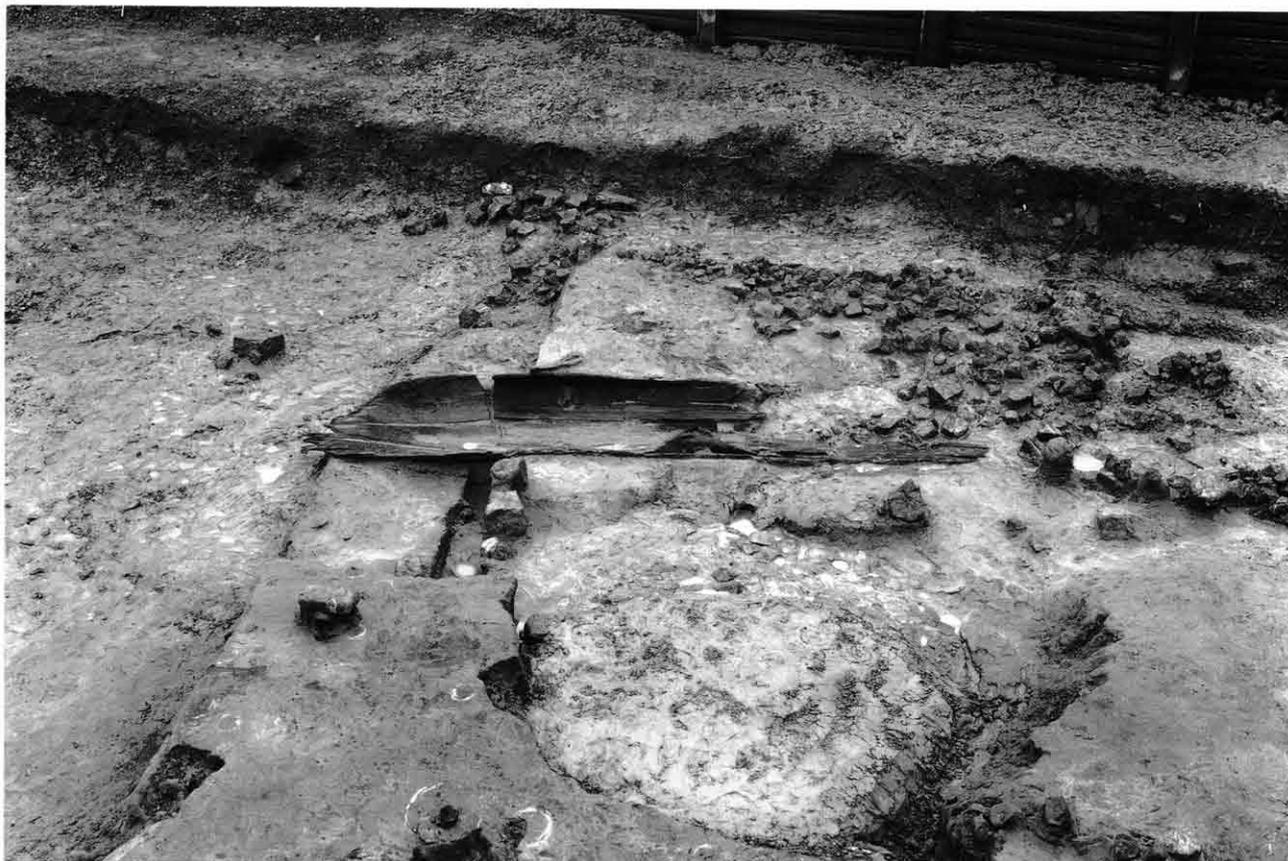
### 与謝郡岩滝町大風呂南墳墓群出土のガラス釧<sup>おおぶろ</sup><sub>くしろ</sub>

直径約9.7cmを測るガラス製の腕輪である。その内径は5.8cm、重量は約170gである。輪の断面は、外縁に明確な稜を持ち、内縁にゆるやかな曲線を描く五角形を呈する。色調は、淡いコバルトブルーを呈し、透明度が高い。

出土地は、丹後半島南部の阿蘇海を見下ろす標高59mの丘陵先端部に営まれた、岩滝町の大風呂南墳墓群である。墳墓群は、中世の稲富氏の居城である弓木城の築城に伴い改変を受けているが、弥生時代後期から末期にかけて営まれた2基の台状墓である。ガラス釧が出土した1号墓の第1主体部は、巨大な舟底状を呈する木棺である。棺内の中央付近、被葬者の左手の位置と想定される地点から、ガラス釧は出土した。棺内には、そのほか、鉄剣11振り、鉄鏃4点、ヤス状鉄製品、銅釧13点、貝輪1点以上、ガラス勾玉6点以上、緑色凝灰岩製管玉100点以上が副葬されており、当地域の王墓と考えられる。

(白敷 真也<sup>しらす</sup>＝岩滝町教育委員会)

巻頭図版2 海上で用いられた丸木舟



(1) 丸木舟出土状況（東から）



(2) 丸木舟近景（南東から）

巻頭図版3 愛宕神社1号墳の中国鏡について



愛宕神社1号墳出土四獣形鏡

# 海上で用いられた丸木舟

## —浦入遺跡群R地点出土の縄文時代前期の丸木舟—

石井清司・田代 弘

### 1. はじめに

浦入遺跡群は、関西電力による火力発電所建設工事に伴う調査として、平成5年度から舞鶴市教育委員会とともに継続して調査してきた。律令期の製塩遺跡と下層の縄文時代遺跡を主な対象としたが、縄文時代に関連する平成9年度調査の最大の成果は丸木舟を検出したことである。検出当初、共伴遺物が少ないことから丸木舟の帰属時期を漠然と前期末としたが、その後、放射性炭素年代測定や土層の検討から、前期中葉に遡ることがわかった。海浜部からの出土資料であり、海上で利用されたことが明らかな丸木舟として希少な事例であるので、紹介しておきたい。

### 2. 遺跡の位置と環境

浦入遺跡群は京都府舞鶴市千歳ほかに所在する。この地は、舞鶴湾口の西縁をなす大浦半島の先端付近に形成された浦入湾岸にあたる。浦入湾は、外海である若狭湾と内海の舞鶴湾の出入り口に位置し、海上交通の要所である。湾は通称松ヶ崎とよばれる砂嘴に守られ、外海が大荒れのときにも大変穏やかであるので、古代においては風待ち、潮待ちの港として大いに利用されたものと思われる。海上交通の視点からみると、由良川河口域、宮津湾岸と近距離にあり、浦入遺跡群はこの方面で確認されている古代の遺跡群と密接な関わりをもって展開したと推測される。

浦入遺跡群は、予備調査の段階では奈良時代から平安時代末期頃の製塩遺跡とみられ、浦入製塩遺跡としていたが、下層調査の進展につれて、縄文



第1図 浦入遺跡群調査区配置図

時代早期から晩期にかけて生活面が予想外に良好な状態で遺存していることがわかり、浦入遺跡群と名称を変更した。縄文時代に関する主な成果としては、次のものがある。

平成5年度にM地点(嶋遺跡)の調査では、明確な遺構はなかったものの、縄文時代前期海進層である松ヶ崎礫層と砂堆の堆積環境を把握し、約4000年～約4500年前の海面の低下、約4000年前～約3000年前の海面の上昇を確認し、海退期の泥炭層などを確認した。平成6年度にN地点下層で縄文時代早期末頃の表裏縄文土器を含む包含層の一部を確認した。縄文時代の遺物が最も集中するのは、浦入湾東岸にあるP地点である。この地点は舞鶴市教育委員会が調査を行っており、早期、前期、中期、後期の各時期の良好な資料を得ている。約6300年前に降灰したアカホヤ火山灰層を含む堆積層から、尖底の表裏縄文土器とともに大型の球状耳飾りが出土している。球状耳飾りは、直径6.6cmと大型で、最古の型式を示す資料として重要なものである。また、前期の北白川Ⅰ～Ⅲ式や中期初頭の船元式、中期末の北白川C式などについても層位的資料に恵まれ、新知見が得られた。北陸をはじめ他地域との地域交流を検討しうる土器型式や石器などの資料が多数存在している。丸木舟は浦入湾口のR地点において検出した。<sup>(注1)</sup>

### 3. 丸木舟の出土状況

浦入湾口には西岸から南東に300mにわたって延びる砂嘴がある。この砂嘴は松ヶ崎と通称され、M地点として調査を実施した所である。R地点はこの砂嘴の付け根部分に位置し、南は外海、東は内海に面する。調査時には宅地に改変されていたが、かつては小さな入江があった。

R地点が縄文時代の遺跡であるらしいということは、前年度に実施された製塩遺構の有無を確かめる舞鶴市教育委員会の試掘調査でわかった。当調査研究センターは平成9年度に舞鶴市教育委員会から委託を受けて、R地区の調査を実施した。約650㎡について縄文時代遺物包含層の広がりを確認することと、遺構を把握することを目的として調査を始めた。

表土下約20cmのところには暗茶褐色を呈する遺物の希薄な縄文時代中期包含層があったが、遺構の検出には至らなかった。この層は下層の海成の青灰色砂層が土壌化したもので、含まれていた炭化物の放射性炭素年代測定結果は約4000年前を示している。前期から中期後半に後半にかけての包含層の大半は近代の建築物建設の際に破壊され、南東側方向約10mの範囲を確認したに過ぎない。下層の青灰色砂層は幾層にも分かれて、無遺物層である洪積層再堆積物に至るまで続いていた。洪積層再堆積物は、丘陵を構成する洪積面に沿って急傾斜をなしており、海成砂層はこの傾斜面を埋めるようにして堆積していた。この海成砂層は約4000年前～約5000年前の年代を示す。砂層には少量の遺物の混入が認められたので、無遺物層まで掘り下げる過程で、丸木舟を検出した。

丸木舟は、洪積層再堆積物のほぼ直上に位置し、青灰色砂層に埋もれた状態で出土した。検出高さは標高0.5mである。砂層を除去し、丸木舟を露出させたところ、当時の海岸線が現われた。丸木舟が利用されていた当時の浜はあまり砂の堆積がなく、陸上から供給された拳大から人頭大の角礫が主体であることがわかった。丸木舟は汀線と主軸を同じくしている。

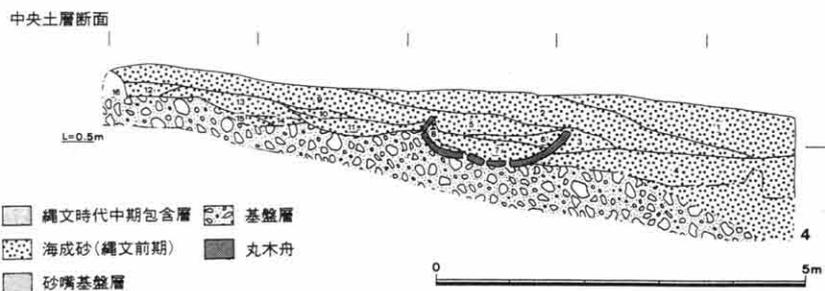
丸木舟より低い位置に杭跡とみられる腐蝕痕跡があったので精査したところ、端部を挟った杭

海上で用いられた丸木舟

を検出した。海中あるいは水際に杭を打ち込んで構造物を設けていたようである。礎石とみられる石も出土しており、この付近に棧橋状の施設があったとみられる。杭、礎石は丸木舟よりやや新しいものであるが、海成砂層である青灰色砂層中の遺物であり、縄文時代中期以前のものであることは確かである。丸木舟は一見すると不要となって廃棄されたものが海岸に漂着したという検出状況を示すが、後出するものとは言え、このような杭や礎石が存在する点から、検出地点は船着き場としての機能を有する場所であったと考えることができよう。



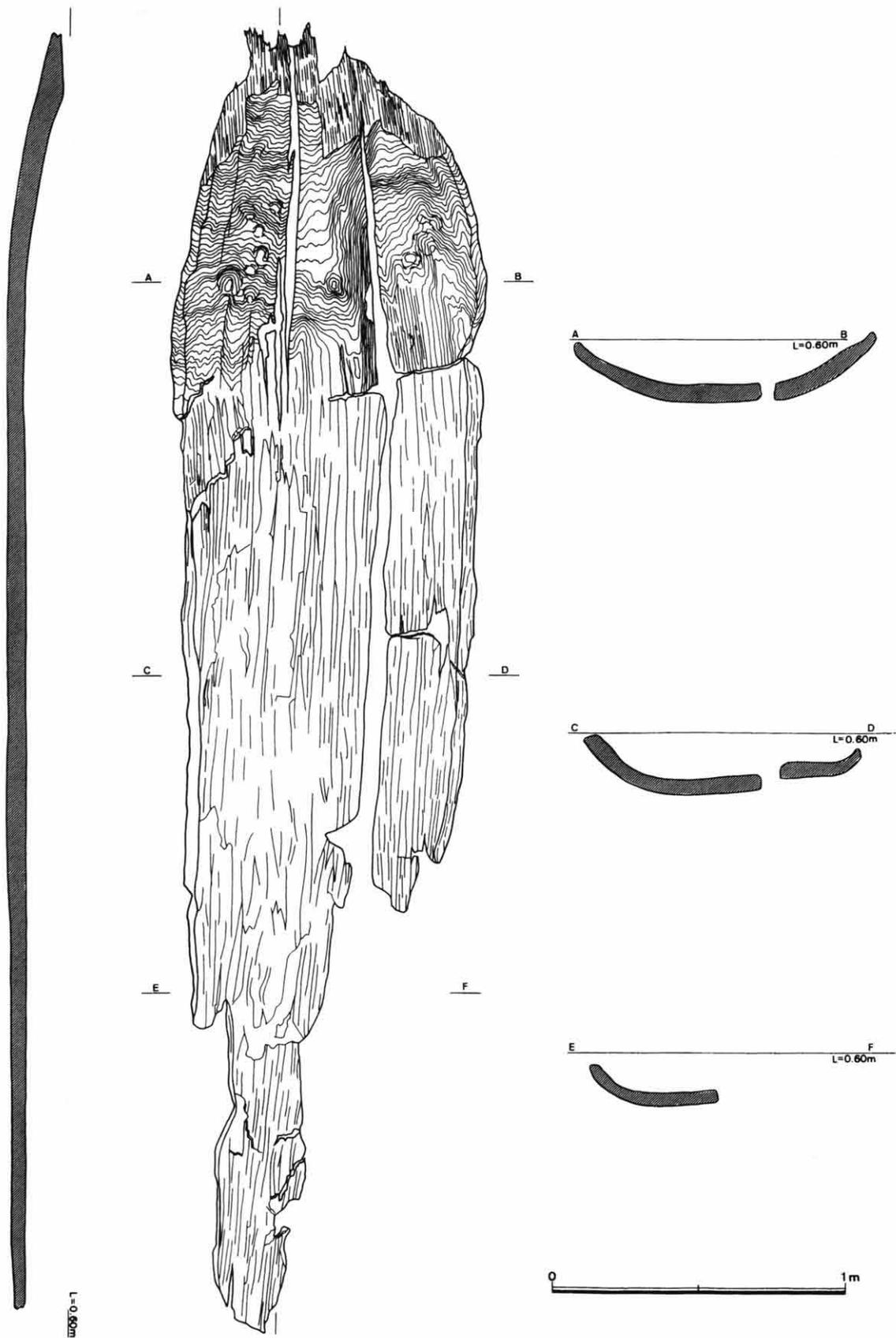
第2図 浦入遺跡群R地点平面図



第3図 浦入遺跡群R地点丸木舟出土層位

#### 4. 丸木舟の形状と年代

出土した丸木舟は、船体の半分ほどが遺存していた。全形は明らかでないが<sup>(注2)</sup>鯉節形とみられる。遺存部分は幅が広く、船首から船体の半ばにかけての部分であろう。船首とみられる船端部は、上端が厚く作られている。残存長は約5mである。船底の厚みは約7cmである。最大幅は現状で約1mである。丸木舟の幅は約60cm内外の例が多いようであるが、本例は船幅が土圧による変形を受けた状態で計測しているために、やや大きめの値を示していると思われる。使用木材はスギである。表面は丁寧な調整が行われ、所々に製作痕跡とみられるくぼみに焦げ目がみられる。丸木舟の製作にあたっては、磨製石斧などで成形する際に木材を柔らかくし、加工しやすいように



第4图 浦入遺跡群R地点出土丸木舟実測図

することや、防水性を高めるため船体表面を綿密に整えることを目的として、松明などで木材を焦がしながら作業を進めたと推定されているが、焦げ目はその作業を示す痕跡であろうか。

船体の一部を放射性炭素年代測定の試料とした。株式会社古環境研究所による分析結果では、B. P. 5270±90を示した。丸木舟の出土層位に該当する青灰色砂層下層からは、北白川Ⅱ a 式の粗製深鉢の出土をみており、縄文時代前期中頃に位置づけうるものである。

なお、丸木舟は京都府下では本例以外に、向日市森本遺跡(縄文時代後期)、長岡京市神足遺跡(弥生時代)で検出されている<sup>(注3)</sup>。

## 5. 成果と問題点

今回検出した丸木舟の意義についてまとめておきたい。

浦入湾は、冒頭で記したように、舞鶴湾に面し、砂嘴を越えて北西に出ればすぐに若狭湾という海洋性の環境を有しており、淡水域も狭小な谷川に限られる。このような環境や、臨海の高成砂層中で検出されたことなどから、本例は海上航行に用いられた丸木舟であることは疑いない。

丸木舟の全長についてであるが、船体の遺存状況から全長を復元すると、少なくとも8m前後にはなるのではないだろうか。計測値は保存化学処理が完了した段階で改めて検討したい。網谷克彦氏は鳥浜貝塚出土丸木舟に比べて大型であるという印象を述べられている。森 浩一氏は、大型であり、汽水域や内海を航行を主体とする丸木舟ではなく主に外洋航海用として用いられたものであろうと指摘された。橋口尚武氏は千葉県下の縄文時代丸木舟を検討して5段階評価し、5～7m以上のものが外洋航海用として有利なものとして<sup>(注4)</sup>いる。以上のような見解をふまえて考えると、本例はこれまで発見されている二百数十例の中でも最大級の丸木舟であり、波浪の激しい外海を航行する船といえそうである。

縄文時代には、ヒスイ製玉類や石器用石材、アスファルトなどが特産地域から広い範囲に搬出され、広範な交易システムが存在していたことが明らかにされており、とくに硬玉製品や南海産貝輪など列島全域に渡るような遠隔地交易や渡海を伴う交易においては、海上航行具としての丸木舟の存在が不可欠と考えられている<sup>(注5)</sup>。しかし、発見されている大半は、河川沿いの沖積地・湖において発見された河川・内湖用であり、海上での使用を示す事例は極めて少ないことから、縄文時代の交易における丸木舟の利用は、民俗学や文化史的観点からの補足によって説明されることが多い。海上で利用されたことが確実視される丸木舟は、長崎県西彼杵群多良見町伊木力遺跡<sup>(注7)</sup>(轟B式)、東京都北区中里遺跡<sup>(注8)</sup>(中期初頭)、神奈川県横須賀市伝福寺遺跡<sup>(注9)</sup>(中期初頭)、千葉県香取郡多古町七升遺跡<sup>(注10)</sup>(中期)など数えるほどである。本例は縄文時代前期に海上で利用された丸木舟であることが確実な資料であり、以上の資料とともに縄文時代の交易や流通を論じる上で不可欠な資料となるだろう。本例は浦入遺跡を特徴づける遺物であるというばかりでなく、交易論的観点からみても学史上極めて重要な資料といえることができるのである。

ところで、浦入遺跡群には近在あるいは遠隔地から様々な遺物が運ばれている。早期末から前期初頭段階の富山県産とみられる蛇紋岩製の球状耳飾りが出土しており、藤田富士夫氏からわが

国で最古最大の優品であるのご教示を受けた。また、中期前半には北陸から新保・新崎式土器が搬入され、琥珀製の玉類、良質の蛇紋岩製の磨製石斧も搬入されている。少量であるが、島根県隠岐産の黒耀石もある。打製石器用石材としては丹後半島産の流紋岩が主体をなすが、奈良県二上山産サヌカイトも数多く利用されている。搬入品の中で、北陸産、島根県産と考えられるものは、海上ルートでもたらされたとみることができる。丹後には、これ以外にも北陸から搬入された遺物がある。大江町三河宮ノ下遺跡の蛇紋岩製垂飾品・玦状耳飾り、舞鶴市志高遺跡の玦状耳飾り、丹後町平遺跡の新保・新崎式土器・蛇紋岩製磨製石斧・蛇紋岩製垂飾品などで、新潟県南西部と富山県北東部の糸魚川・青海地域の生産遺跡から運ばれたとみられる。糸魚川・青海地域は、豊富な原材料産出地をひかえた硬玉製・蛇紋岩製垂飾、蛇紋岩製磨製石斧の一大生産地であり、縄文時代中期には、南は九州、北は北海道にかけて半径1000kmに及ぶヒスイの交易圏を形成することから、日本海沿岸地域を結ぶヒスイロードともいうべき海上ルートが開発されていたと考えられている。<sup>(注11)</sup>丹後地域へもこのルート上を北陸産石製垂飾品類が運ばれてきたのであろう。

地質学的検討を加えたニュージェック株式会社大石氏によると、丸木舟が出土した地点は砂嘴の基部にあって現在は外海と内海が隔てられているが、丸木舟が使われていた縄文時代前期当時は、砂嘴の発達途上の段階であり、外海に面していた可能性もあるとのことである。内海と外海が砂嘴により隔てられていたとしても、砂嘴は水面に現われておらず、丸木舟で渡越しうるような環境を考えておけばよいであろう。浦入の縄文人は、外海との境界に位置するこのような場所を、外海へ漕ぎ出す際に船溜まりとして利用したのだろう。舞鶴湾奥の南東斜面を居住域とした縄文人にとって丸木舟は主要な交通手段であり、必需物資を調達する交易手段でもあったのである。

浦入の丸木舟は北陸産石製垂飾品類などの遠隔地交易に一役買っていたのかもしれない。

なお、本文は田代が執筆し、石井が校閲した。作図は石井、巻頭写真は田中 彰による。

(いしい・せいじ=当センター調査第2課調査第4係主任調査員)

(たしろ・ひろし=当センター調査第2課調査第2係調査員)

注1 吉岡博之・和泉大樹・田代 弘「京都府舞鶴市浦入遺跡群」(『日本考古学協会年報1997年度』日本考古学協会) 1998

注2 清水潤三「日本古代の船」(『日本古代文化の探求 船』大林太良編 社会思想社) 1975

注3 竹原一彦「長岡京跡左京第36次(7ANDII)発掘調査略報」(『長岡京』第18号 長岡京発掘調査研究所) 1980

注4 橋口尚武「渡海の考古学—東日本の丸木舟・準構造船と伊豆諸島—」(『人類史研究』9) 1997

注5 宇野隆夫「原始・古代の流通」(『古代史の論点3 都市と工業と流通』小学館) 1998

注6 藤田富士夫「丸木舟づくりの島」(『縄文再発見 日本海文化の原像』大巧社) 1998

注7 『伊木力遺跡』同志社大学文学部文化学科 1990

注8 『中里遺跡発掘調査の概要Ⅱ』中里遺跡調査会 1985

注9 注4と同じ

注10 注4と同じ

注11 森 浩一編『古代翡翠道の謎』新人物往来社 1990

# 長岡京跡右京第589次・下植野南遺跡の発掘調査

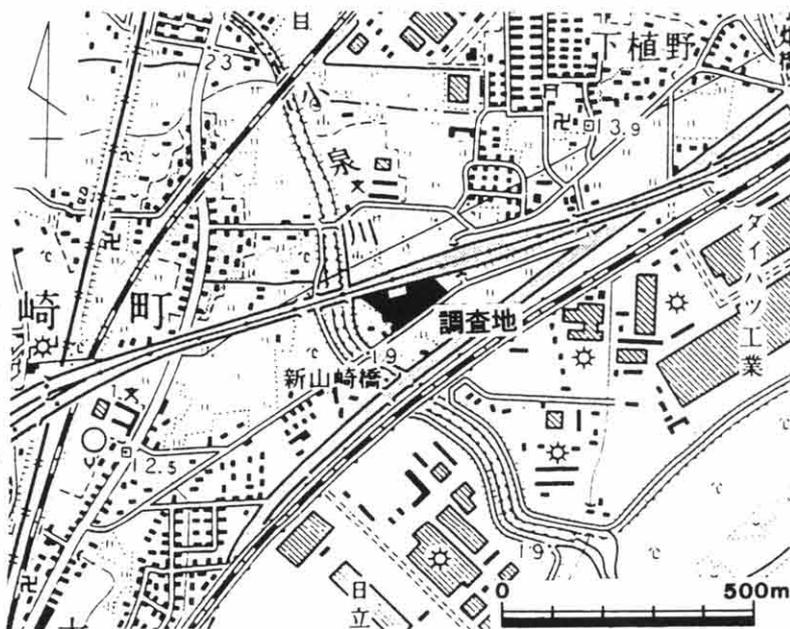
中村 周平

## 1. はじめに

今回の発掘調査は、中央自動車道西宮線(名神高速道路)大山崎ジャンクション建設に伴い、日本道路公団の依頼を受けて実施した。調査対象地は、長岡京右京の南端に隣接し、『京都府遺跡地図』によると、縄文時代から弥生時代にかけての集落遺跡である下植野南遺跡の範囲に含まれている。この付近では、これまでに名神高速道路の拡幅工事や、大山崎町体育館の建設に伴う発掘調査が行われており、弥生時代から平安時代・中世にかけての溝跡、竪穴式住居跡群・掘立柱建物跡・土坑などが多数検出されている。今回の発掘調査では、主に古墳時代後期を中心とする竪穴式住居跡群や溝跡・土坑などを検出し、それに伴い土師器・須恵器・滑石製玉類などの多数の遺物が出土した。

## 2. 調査の概要

**竪穴式住居跡群** 調査地中央部分を中心に、これまでに30基の方形の竪穴式住居跡を検出した。住居跡の規模は、4～5m四方のものが最も多く、大きいものでは、5.6m四方で30㎡を超えるものもある。住居跡内から出土した土師器や須恵器の多くは古墳時代後期、6世紀前半から中葉にかけてのものであり、この時期を中心に集落が営まれていたと考えられる。また、住居跡内の埋土からは、土器のほか滑石製白玉・勾玉なども出土している。この内、滑石製白玉は出土数も多く、調査地北域の住居跡(SH07)の埋土からは218点、住居跡(SH19)の埋土からは2点、調査地西域の住居跡(SH11)の埋土からは3点、調査地南域の住居跡(SH113)の埋土からは34点と、総数257点がこれまでに出土している。滑石製勾玉はこれまでに2点出土してお



第1図 調査地位置図(1/15,000)



第1表 竪穴式住居跡一覧表

番号	遺構番号	規模(東西×南北)	カマド	出土遺物	備考
1	SH06	4.2m×4.2m	焼土塊	土師器片	
2	SH07	5 m×6 m	焼土塊	土師器片、須恵器片	白玉218点
3	SH08	4 m×4.4m		土師器片、須恵器片	
4	SH09	4 m×4.2m		土師器片、須恵器片	
5	SH10	3.6m×2 m(?)		土師器片、須恵器片	
6	SH19	5.6m×5.6m		土師器片、須恵器片	白玉2点
7	SH20	3.8m×3.8m		土師器片、須恵器片	
8	SH23	3.2m×3.6m		土師器片	
9	SH25	? m×4 m		土師器片、須恵器片	
10	SH36	4.2m×4.2m	焼土塊	土師器片、須恵器片	
11	SH37	4.4m×4.4m		土師器片、須恵器片	
12	SH38	3.6m×4.2m		土師器片	
13	SH39	4.6m×4.6m(?)	焼土塊	土師器片、須恵器片	
14	SH40	4.8m(?)×4.8m	焼土塊	土師器片、須恵器片	
15	SH41	?		土師器片、須恵器片	
16	SH61	4.4m×? m		土師器片、須恵器片	
17	SH64	3.8m(?)×5.2m	有り・北辺	土師器片、須恵器片	
18	SH67	2.8m×2.8m		土師器片、須恵器片	
19	SH89	5 m(?)×? m	焼土塊	土師器片、須恵器片	
20	SH111	? m×5.2m		土師器片、須恵器片	白玉3点
21	SH113	5 m×5.2m		土師器片、須恵器片	白玉34点
22	SH115	4.2m×4 m	有り・北東辺	土師器片、須恵器片	
23	SH116	5 m×4 m		土師器片、須恵器片	
24	SH120	4 m×4.4m	有北西辺	土師器片、須恵器片	
25	SH121	4 m×4.4m	焼土塊	土師器片、須恵器片	勾玉1点
26	SH122	5.2m×4.4m	焼土塊	土師器片、須恵器片	
27	SH123	4.8m×4.8m	焼土塊	土師器片、須恵器片	
28	SH150	4.8m×4.5m		土師器片、須恵器片	
29	SH151	4.6m×4.8m		土師器片、須恵器片	
30	SH154	4 m×4 m		特になし	

り、そのうちの1点は住居跡(SH121)内の南東部から、あと1点は調査地中央域の包含層から出土した。竪穴式住居跡の中には、造り付けの竈を持つものもある。調査地北域の住居跡(SH64)の北辺、調査地西域の住居跡(SH120)の北西辺、調査地中央域の住居跡(SH115)の北東辺には、それぞれ、馬蹄形を呈した黄褐色から橙褐色の焼土の跡を検出しており、竈の跡と考えられる。その他の竪穴式住居跡内にも、黄褐色から橙褐色の焼土の跡と思われる遺構をいくつか

検出しているが、その性格については、いまのところ不明である。また、住居跡外にも焼土の跡と思われる痕跡をいくつか検出しており、さらに数多くの竪穴式住居跡が広がる可能性がある。

**溝跡** 溝跡(SD22)は、調査地中央域を北から南南東に向けて流れる溝跡で、幅約2.0m・深さは約0.4~0.7mを測り、総延長約40mにわたって検出した。断面はU字形を呈し、砂礫や砂質土で埋もれていた。埋土から出土した土器の多くが、6世紀前半代のものであることから、集落が営まれていた時期とほぼ同時期に機能していたと考えられる。この溝を境に、東側では竪穴式住居跡の数が少なくなっている。

**掘立柱建物跡** 掘立柱建物跡(SB96)は、調査地中央北域にある3間×5間の南北棟の建物跡である。溝跡(SD22)の埋土の上面から柱穴が掘り込まれており、溝跡(SD22)よりは、新しい時期に建てられたものと考えられる。掘立柱建物跡(SB107)は、調査地中央南域にある2間×3間以上の南北棟の建物跡である。南辺が、調査地南壁にかかるため、南北3間以上の規模を持

つ可能性がある。柱穴からは遺物が出土しておらず、建てられた時期は不明である。掘立柱建物跡(S B91)は2間×3間の南北棟の総柱建物跡である。柱掘形は直径0.8~1.0mを測る大型のもので、何らかの倉庫的な役割を持った施設と考えられる。建物の建てられた時期については、柱穴から少量の土器片が出土したものの、詳しくは不明である。ただこの建物跡も、掘立柱建物跡(S B96)と同様、溝跡(S D22)の上面から柱穴が掘り込まれていることから、溝跡(S D22)よりは新しい時期に建てられたものと考えられる。建物跡(S B92)は調査地東域にある2間×4間の南北棟の建物跡である。この建物の北西隅の柱穴からは、完形の須恵器杯身1点と、滑石製白玉1点が出土した。建物の時期は今のところ6世紀前半と考えている。

### 3. まとめ

今回の発掘調査では、主に古墳時代後期を中心とする竪穴式住居跡群で構成される集落を確認した。大山崎町教育委員会による大山崎町体育館建設に伴う調査においても、古墳時代後期の竪穴式住居跡等が多数検出されており、今回の調査成果とあわせて、多数の竪穴式住居跡等で構成された下植野南遺跡の集落の構造の一端が明らかにできた。

現在、発掘調査は古墳時代後期の遺構面を終了し、下層調査に着手している段階である。これまでに、古墳時代前期の竪穴式住居跡や土坑、弥生時代の方形周溝墓などを検出しており、遺構内からは、土師器や弥生土器なども出土している。これらの調査成果については、次回、機会を改め報告する予定である。

(なかむら・しゅうへい=当センター調査第2課調査第4係調査員)



調査地南域 竪穴式住居跡群(S H36・S H39・S H37・S H40 東から)

## 平成10年度発掘調査略報

8. <sup>みなみ だに</sup>南谷古墳群 C 支群

所在地 熊野郡久美浜町字壺分小字南谷・字女布小字北谷

調査期間 平成10年5月19日～8月12日

調査面積 約890m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は、農林水産省が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」に関連する、壺分団地と女布団地の連絡道路建設工事に伴い、同省近畿農政局の依頼を受けて実施した。調査地は、久美浜湾に向かって北に流れる佐濃谷川中流域の右岸の丘陵上で、久美浜町字壺分と字女布の地境に所在し、北側が壺分小字南谷、南側が女布小字北谷である。周辺には、南谷古墳群A・B支群、塚ヶ谷古墳群、鶏塚古墳、北谷古墳群、薬師古墳群や、女布遺跡、女布北遺跡などの古墳時代の遺跡が点在し、佐濃谷川流域でも古墳群が集中する地域のひとつである。

この遺跡は、『京都府遺跡地図』には、北谷古墳群の一部として記されているが、近年の京都府教育委員会・久美浜町教育委員会および当調査研究センターの調査成果から、南谷古墳群C支群と遺跡名を変更した。C支群は、群中の最高所に位置する最大の1号墳を中心とする古墳群で、1号墳から北西および南西に延びる尾根筋に、計5基の古墳が想定されていた。今回、1号墳と東尾根に新たに確認された古墳状隆起が、工事にかかるために、発掘調査を行った。

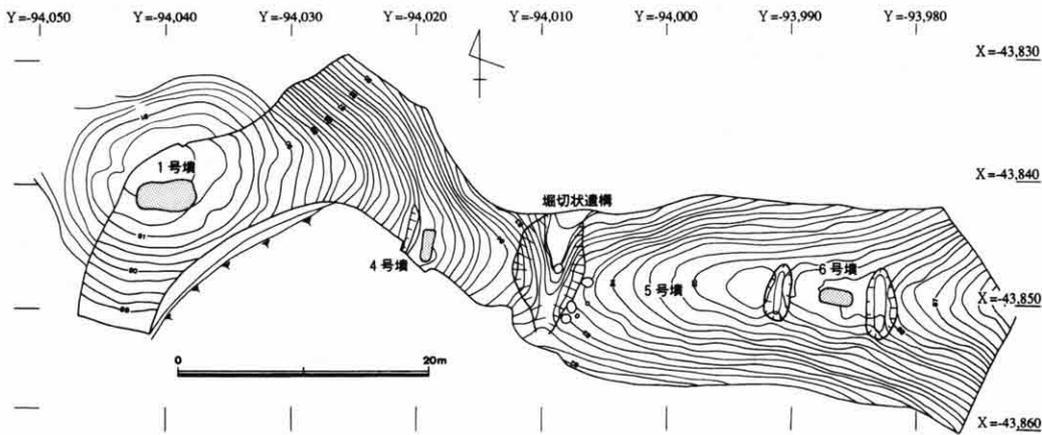
調査概要 調査は、東尾根については遺構の有無を確認するため、尾根線上に試掘トレンチを設けて調査した。その結果、古墳の埋葬施設と切り離し溝および堀切状遺構などを確認したので、調査範囲を拡張した。1号墳については、工事掘削範囲内で面的に調査を実施した。なお、1号墳の南西尾根に想定されていた2基の古墳が、現地表面では確認できなかったため、新たに検出した古墳を、北西尾根の2・3号墳に続いて4・5・6号墳と呼ぶ。

1号墳 地形測量から、直径18m前後の円墳と推定される。東西方向に主軸をとる主体部は、長さ4.5m・幅2.3m・深さ45cmを測る。一部に残った木棺痕跡が「U」字形を呈すること、および墓壙底部中央がわずかにくぼむことから、舟形木棺を直葬したと推定される。棺の底から鉄製品(刀子)が1点出土した。

4号墳 斜面を階段状に削り、わずかな平坦地に埋葬施設を造っている。南北方向に主軸を持つ主体部は、



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 調査地区内遺構配置図

2段に掘られ、1段目は長さ2.6m・幅1m・深さ30～60cmを測る。2段目は長さ1.7m・幅35cm・深さ20cmを測る。北側の棺底から、勾玉(メノウ)1点、管玉(グリーンタフ)1点、棗玉(琥珀)1点、ガラス小玉15点が出土した。玉類の出土状況から、北頭位で埋葬されたと推定される。

**5号墳** 6号墳との区画溝や、6号墳が単体で構築されたとはいえないこと、および周辺が後世に改削が行われていたことが判明したこと等により、古墳は消滅したと推定される。

**6号墳** 尾根を切り離す溝で区画された古墳である。溝間の長さから、長軸約10m・短軸約5～6mの方墳と推定され、中央部に埋葬施設を設けている。東西方向に主軸を持つ埋葬主体部は2段に掘られ、1段目は残存状況が良くないが、長さ2.6m・幅1.2mを測り、2段目は長さ1.8m・幅45cm・深さ20cmを測る。棺の痕跡は明瞭ではない。中央部で鉄製品(鏃)が1点出土した。表土を掘削中に、5世紀末とみられる須恵器の杯蓋が出土した。

**その他の遺構** 4号墳と5号墳の鞍部を堀切状に切り落とした遺構を検出した。この遺構は、上面の幅5m・深さ1.7m、底の幅60cmを測り、掘り鉢状に掘削されている。南方が浅くなっていくので、堀切というより通路(切り通し)の可能性がある。この遺構の底面で、円形土坑1か所を検出した。堀切状遺構の堆積状況から土坑が先行すると推定される。また、周辺で円形土坑3か所・炭混じり土坑1か所を検出している。いずれからも、時期がわかるものは出土していない。

**まとめ** 今回の調査では、円墳1基・階段状古墳1基・方墳1基、および堀切状遺構などを出した。6号墳の表土掘削中に出土した須恵器杯蓋以外に、時期のわかる遺物は見られないが、1号墳は埋葬施設に舟形木棺を採用していることから、丹後地域の出土例からみて、古墳時代前期末～中期のものと推定される。古墳の埋葬施設は、4号墳が地形に制約されて、南北方向に主軸を持つが、1・6号墳は東西方向の主軸を持ち、4・6号墳の埋葬主体部2段目の幅が狭いという共通点がみられる。したがって、この古墳群は1号墳を中心とした同一の集団によって造られたと推定される。堀切状遺構からは、時期がわかる遺物が出土していないが、調査地北東の丘陵に堀切状の窪地が、久美浜町教育委員会の分布調査で指摘されており、堀切状遺構は山城に関連する可能性がある。

(石尾政信)

## 9. <sup>ながとめ</sup>永留城跡(A地点)

所在地 熊野郡久美浜町字永留小字畑山

調査期間 平成10年8月25日～10月14日

調査面積 約130m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は、農林水産省が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」に関連する永留2団地と同1団地の連絡道路建設工事に伴い、同省近畿農政局の依頼を受けて実施した。調査地は、佐濃谷川と川上谷川に挟まれた永留地区の西側の丘陵上に所在する永留城跡(標高88m)から東に延びる尾根の先端部にあたる。永留地区は、南北に走る谷地形(通称本谷)と東西に多数の小さな谷が錯綜し、調査地の東側にも本谷から西に入り込んだ谷筋が見られる。調査対象地には、丘陵先端を切り落とした平坦地と、東から南東側に高低差4～5mで曲輪状地形が認められることから、城跡に関連する遺構の有無を調査することになった。

調査概要 調査では、遺構の有無を確認するために、平坦地・曲輪状地形および傾斜地に試掘トレンチを設け、丘陵を切り土した側に沿った小溝や柱穴を確認し、それを受けて範囲を拡張した。平坦地では、切り土面に平行する幅20～30cmの溝(排水溝)、直線上に並ぶ柱穴3か所(間隔は不揃い)やほぼ直交する柱穴を確認した。平坦面が南東方向に下がることから、流失した柱穴もあったと考えられ、柱穴の配列などから小さな建物の所在が推定できる。また、東斜面は急峻に切り落とされ、容易に登ることができないように造られている。地表面観察から、南東・南西斜面も同様であると判断できる。



調査地位置図(1/50,000)

東側の曲輪状地形の場所では、切り土面に沿って幅20～30cmの排水溝がめぐる。排水溝から幅約2mの平坦面があり、柱穴も検出した。南東部では平坦面がないので、崩落した可能性がある。

まとめ 今回の調査では、平坦地で溝・建物が推定できる柱穴配列、切り落とした急斜面、急斜面下の排水溝・狭い平坦面と柱穴が確認できた。これらの遺構は、出土遺物が平坦地で土師器1点のみであり、時期を明確にはできなかったが、谷筋を見下ろす調査地の立地条件などから永留城跡に関連する可能性が高いといえよう。

(石尾政信)

## 10. 浅後谷南遺跡 (B地区)

所在地 竹野郡網野町公庄

調査期間 平成10年4月20日～8月28日

調査面積 900m<sup>2</sup>

はじめに 網野町浅後谷南遺跡は、国営農地開発に伴い平成9年度から発掘調査を行っている。この内、B地区については既に8月28日に調査を終了して、現在整理作業中である。

調査概要 竪穴式住居跡1棟、溝2条、掘立柱建物跡数棟および掘立柱建物を構成すると思われる柱穴343基、旧流路1条およびそれを再掘削した溝2条を検出した。

竪穴式住居跡SH01は、一辺4mを測る方形の竪穴住居で、西側3/4を削平されている。周壁に沿って周壁溝がめぐっており、床面および周壁溝から土師器が出土した。時期は古墳時代後期のものである。旧流路NR01は幅12m・深さ2.5mの谷地形を流れる流路で、埋没の過程で3回の遺構面を形成している。旧流路NR01の岸はかなり急勾配になっており、自然地形とは考えにくいことから、古墳時代中期以前に人為的に掘削された溝である可能性もある。旧流路NR01が、ある程度埋没した段階で再掘削された溝SD09は、幅約2m・深さ約1mを測る溝で、須恵器の甕が大小合わせて2個体、口縁を下向きにして底面に置かれていた。またその周囲からは、完形率の高い土師器が多量に出土した。これらの土器から、掘削時期は古墳時代中期末と考えられる。

旧流路NR01は、上層から出土した黒色土器などから、最終的に12世紀後半に埋没したと考えられる。溝SD08は、幅約3m・深さ約80cmを測る、鍵形に屈曲する溝である。埋土の状況からこの溝が機能していた時期には滞水していたと考えられる。下層から出土した須恵器・土師器から、古墳時代後期に開削されたと考えられる。掘立柱建物は古墳時代から平安時代に建てられたものである。

出土遺物 竪穴式住居跡からは古墳時代の土師器、溝SD09からは須恵器の甕および土師器、



調査地位置図(1/25,000)

溝SD08からは須恵器の蓋杯、旧流路からは平安時代末の黒色土器に混じり、鞆の羽口、椀形滓など鍛冶関係遺物が出土した。また刀の柄・下駄・鳥形木製品などの木器や、栗・桃・ドングリ・烏貝などの食物も出土した。

まとめ 本調査区は古墳時代から平安時代末まで継続的に営まれた集落遺跡であることが判明した。とりわけ鍛冶関係の遺物が出土した意味は大きく、遠所遺跡などで見られた官営での集中的な鉄器生産が、各集落での生産へと変化していく過程を示す成果となった。

(福島孝行)

# 11. 墓ノ谷古墳群

所在地 竹野郡弥栄町字鳥取小字墓ノ谷

調査期間 平成10年6月8日～7月14日

調査面積 約780m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は、丹後国営農地開発事業に伴う造成工事に先立ち、農林水産省近畿農政局の依頼を受け実施した。墓ノ谷古墳群は、丹後半島中央部を南北に貫流する竹野川の西側丘陵上に所在する。古墳群は標高67～72mの尾根上に位置し、11基数えられ、多くは円墳・古墳状隆起として遺跡地図に記載されている。今回の発掘調査は、7～9号墳を対象に、墳丘規模、主体部の有無を確認するため実施した。

調査概要 調査は対象範囲の伐採を行い、続いて各古墳の平板測量を実施して現況の地形を観察した。これを基に、幅3mのトレンチを入れ、随時拡張して平面的な調査を行った。

7号墳 頂部は標高72mを測り、7～8mの平坦面がある。平板図では69～71mのコンターラインが円ではなく方形を呈している。これは尾根が南東方向に延びていること、また西側が地崩れによるためである。前述の平坦面はこの地崩れによりできたものである。遺物は表土より須恵器1片が出土した。

8号墳 頂部は標高70m、南北長の楕円形を呈する平坦面があり、南側は急斜面、西側は緩斜面で若干地崩れが認められる。遺物・主体部は無かった。

9号墳 頂部は長細い楕円形を呈し、南・北側は急斜面である。平板図では頂部が2か所に分かれ円形を呈するが、これは地震に伴う断層によるものである。

まとめ 調査の結果、6・8号墳では、主体部や墓域造成に伴う区画溝など、古墳に関する遺構を検出できず、また、遺物も出土しなかったため、古墳ではないと判断した。一方、墓ノ谷7



調査地位置図(1/25,000)

号墳と記された地点は、主体部の流失した木棺直葬墳、あるいは埋葬施設の設けられなかった古墳であった可能性も考えられる。なお、埋葬施設の確認されなかった古墳の類例として、弥栄町遠所15号墳などをあげることができる。今回の調査では、7号墳を除いて古墳である可能性は希薄であったものの、谷奥部に遺跡の広がりが見られることは、注意を要すると思われる。

(竹井治雄)

## 12. とお だに 通り 谷 城 跡

所在地 中郡峰山町大字赤坂・矢田小字通り谷

調査期間 平成10年7月14日～9月16日

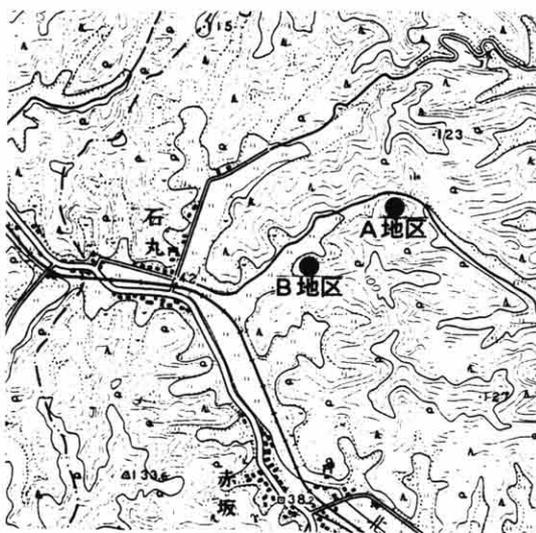
調査面積 約600m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、府営ふる里農道整備事業に伴い、京都府丹後土地改良事務所の依頼を受け実施したものである。調査地は、網野町と峰山町との境界付近であり、竹野川支流である大糸川の源流付近、日本海に直接注ぐ福田川との分水嶺付近に当たる。本調査地は、A地区とB地区の2地区からなり、いずれも通り谷城跡とされている。

調査概要 A地区は通り谷の分水嶺付近の標高91mの丘陵上に位置する。調査の結果、城跡に關係する遺構・遺物は検出されなかった。代わって2基の古墳が検出され、名称は、關係諸機関との協議の結果、ホエケ谷古墳群とすることとなった。

ホエケ谷6号墳 調査地中央部に位置し、明確な墳丘は認められなかったが、南北方向に主軸を持つ素掘りの墓壇1基を検出した。墓壇は隅丸長方形をなし、長辺約3.5m・短辺約1.5m・深さ約0.7mの規模を有する。木棺痕跡は確認できなかった。墓壇検出面で土師器片が少量出土したのみで、内部からは副葬品等の遺物は出土していない。

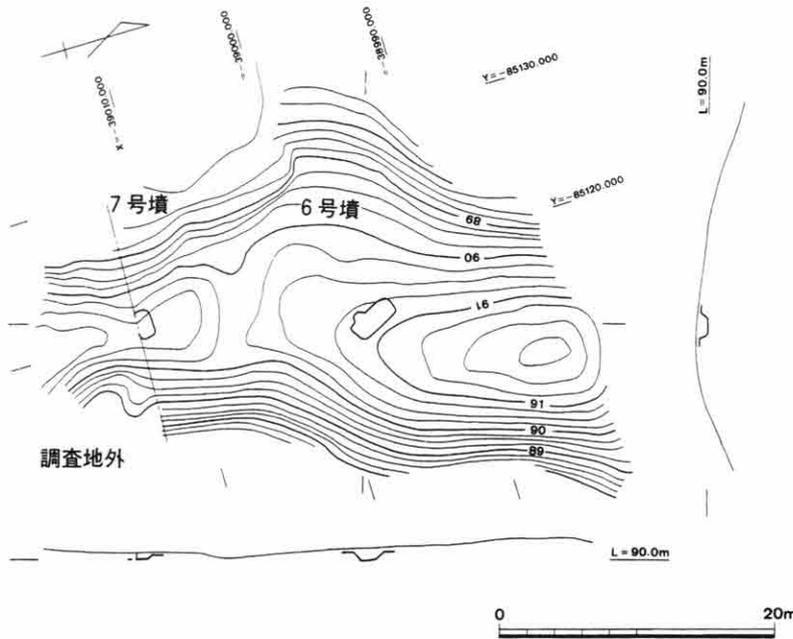
ホエケ谷7号墳 6号墳の南側に位置し、墳丘は丘陵を削り出して方形に整える。墳丘の北側には尾根と区画する幅3m・深さ0.75mの溝が設けられている。墳丘の1/2は造成地外となるが、長辺11m・短辺8m、北側の区画溝からの高さ1mを測る。南側の造成界付近で尾根に直交する素掘りの墓壇1基を検出した。墓壇は、隅丸長方形を呈し、長辺2m・短辺約1m・深さ15cmを測る。内部からは、遺物は出土しなかった。



第1図 調査地位置図(1/25,000)

築造時期については、7号墳の北側区画溝を設ける際に6号墳の土器を壊したようで、溝北側肩部付近より土師器短頸壺、土師器片が出土し、5世紀前半頃と考える。7号墳については、墳丘西側斜面より須恵器高杯脚部が出土し、6世紀後半頃と考えられる。その他、柱穴状の穴11、土坑1・炭窯3を検出したが、時期・性格等は不明である。

B地区は、長さ約26m・幅7～12mの平坦部があり、南端は幅7m・長さ15m・深さ2mにわたる堀切状の施設が設けられている。調査対象地は、



第2図 A地区地形図

この平坦部の北西端約5mにわたる部分と、北側下方のテラス状部分である。トレンチは平坦部分、テラス状部分のそれぞれ全域に設定して、掘削を行った。その結果、城跡に関する遺構・遺物は検出されなかった。その他、土坑1・炭窯1が検出された。土坑は、円形をなし、直径3m・深さ0.5mを測る。内部から須恵器杯身が出土している。

る。8世紀中頃のものと考えられる。

まとめ 通り谷城跡A・B地区の調査を実施したが、いずれも城跡に関する遺構・遺物は検出されず、古墳2・土坑2・炭窯4が検出された。

古墳は、谷の奥まった所に築かれているが、通り(道路)谷という小字名が示すように、ここは集落と集落を結ぶ幹線道路沿いであった可能性がある。また、古墳群が丘陵先端に築かれなかった点については、分水嶺付近で谷が「く」の字状に屈曲し、この屈曲部に古墳の立地する丘陵が延びており、先端に築造すると古墳が隠れてしまうため、両側の谷部から、古墳側面が見える位置に築造したのと考えられる。

また、炭窯については、いずれも基底部付近のみ残存していたものであるが、周辺には赤坂地区製鉄遺跡や赤坂木炭散布地、小耳尾遺跡などの製鉄および製鉄関連遺跡があることから、この通り谷の中でも製鉄遺跡が存在する可能性がある。

(増田孝彦)

## 13. <sup>いまばやし</sup> 今林遺跡第2次

所在地 船井郡園部町内林町今林

調査期間 平成10年8月11日～10月15日

調査面積 約300m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、新光悦村建設予定地内における遺跡範囲の確認のための試掘調査である。今林遺跡および今林古墳は、平成5・6年度に京都縦貫道園部I.C.建設に伴って発掘調査が行われており、弥生時代後期から古墳時代中期の竪穴式住居跡、古墳等が検出されている。この時の分布調査により、さらに6基の古墳が確認され、周知されるにいたっている。

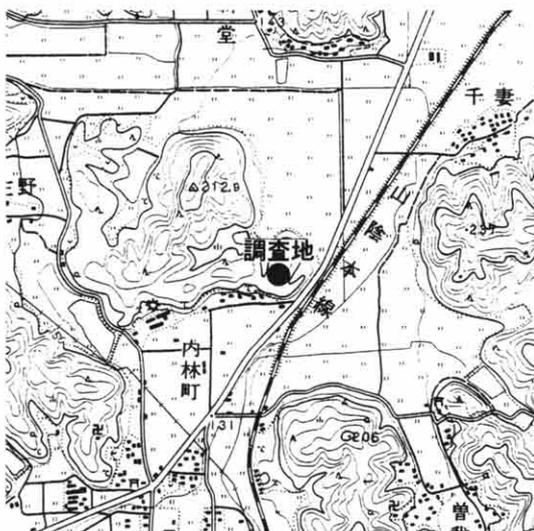
調査概要 調査地の標高は約150～172mで、13か所の調査をした。各トレンチでは、地表下約0.5～1.5mまでの掘削を行い、遺構・遺物の有無を確認した。調査成果は以下のとおりである。

第1～4・12トレンチで円形に復元できる竪穴式住居跡をそれぞれ1基検出した。第1～4トレンチでは、丘陵の緩斜面上に、住居全体を深く削り込んで平坦面を確保しており、その壁の基底部には幅10cm程度の溝を持つ。住居の埋土からは弥生土器が出土している。

第2トレンチの西半で検出した住居跡は、トレンチ西側に構築されている4号墳の基底部付近から2段に削り込み、住居の平面を確保しているが、この削り込みが古墳に伴うものか住居に伴うものかは今回の調査では不明である。住居内の埋土からは、上層で古墳時代の須恵器が、下層からは弥生土器が出土している。

第12トレンチで検出した竪穴式住居跡は、今回の調査で検出した住居の中では最も低い標高約153mに建てられており、北斜面の谷地形に立地する。

第13トレンチで検出した竪穴式住居跡は、丘陵の斜面側が流失していたが、稜部側には地山を削り出して基底部に壁溝を設けている。埋土内からは弥生土器壺や砥石などが出土した。



調査地位置図(1/25,000)

第7トレンチでは、掘立柱建物跡の柱穴を検出したが、建物の規模や構造については明らかにすることができなかった。柱穴内からは、弥生土器が出土している。

まとめ 調査の結果、検出遺構では、弥生時代の掘立柱建物跡、竪穴式住居跡もしくは住居と考えられる遺構6基、出土遺物では、第6・10トレンチを除く各地区で弥生時代・古墳時代の時期の遺物が出土した。

(戸原和人)

## 14. こも いけ 菰池遺跡

所在地 相楽郡木津町木津菰池・釜ヶ谷  
 調査期間 平成10年7月1日～10月29日  
 調査面積 約1,900m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、関西文化学術研究都市の整備事業に伴い、住宅・都市整備公団関西支社(関西文化学術研究都市整備局)の依頼を受けて実施した。菰池遺跡は、京都盆地の南端付近の洪積丘陵の縁辺で、木津川の支流である釜ヶ谷川流域の尾根状丘陵の先端近くに位置している。この遺跡は、周知の遺跡である赤ヶ平遺跡の南隣接地として調査を進めたが、試掘の結果、遺構・遺物が検出されたため、所在地の字名をとって菰池遺跡と命名し、丘陵上にみられる平坦部のほぼ全域に範囲を広げて面的調査を実施した。

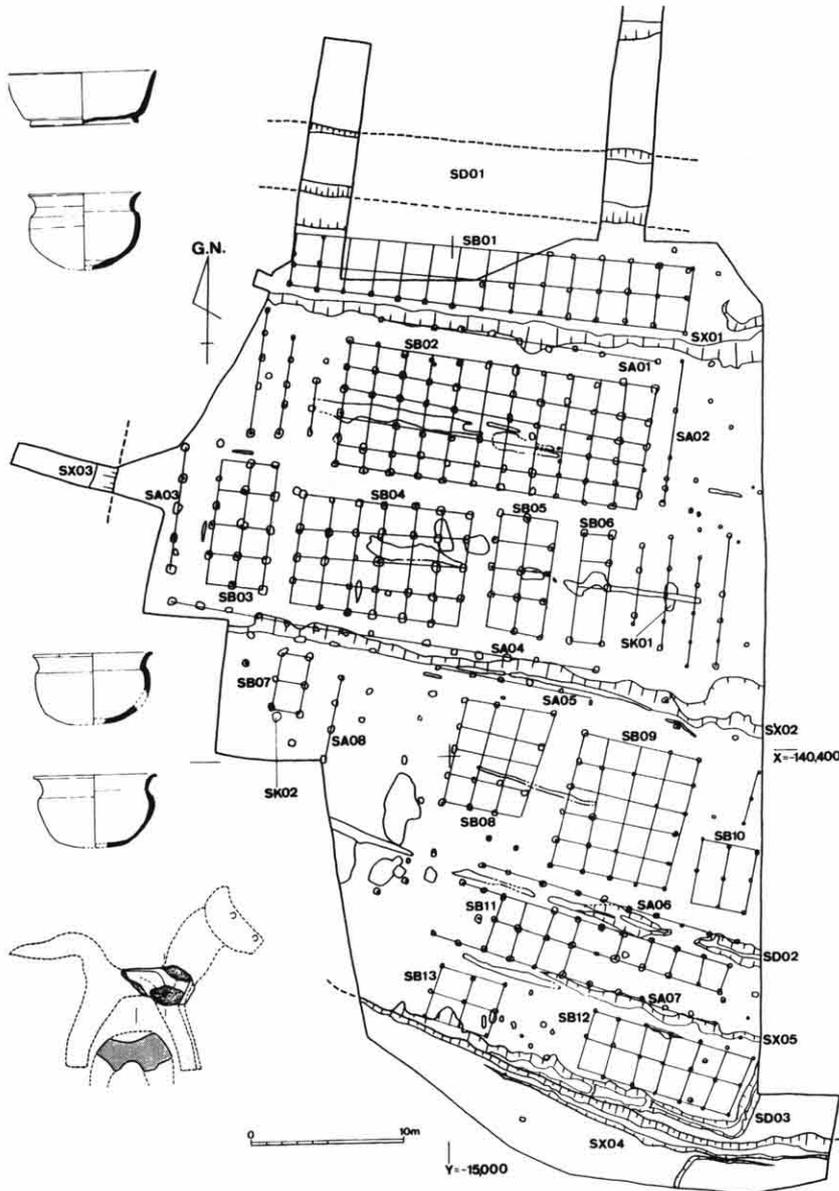
**調査概要** 調査の結果、奈良時代と江戸時代の遺構・遺物が検出された。奈良時代の遺構は、完形の土師類が据え置かれたS K01・02のみであるが、遺物はほかにも包含層中から出土した。

江戸時代の遺構は、多数の掘立柱型式の柱穴群と、それらを取り巻く溝を伴う段状遺構である。いずれも出土遺物は少ないが、18世紀に機能したものとみられる。柱穴は、一辺20～60cmの方形プランの掘形をもち、径5～15cmの柱痕跡を残すものである。柱間寸法は1.8mを基本としている。柱通りや柱間寸法の違いなどから、第2図に示したような建物及び柵を復元した。

調査区の北半の段S X01とS X02で一段高く削り残された長方形の区画には、四隅を柵で囲った内部に大小5棟の建物が整然と配されている。この敷地の北半部を大きく占めるS B02は、桁行11間×梁間5間の最大規模の建物である。建物の南側の1間分は他と比べて柱間が狭く、庇か縁とみられる。柱穴の配置は総柱構造であり、床張りの建物と考えられる。この区画の南半部には、南北を4間にそろえた大小の建物が、東西に接するように4棟配されている。これらの建物跡にも床束が存在する。S X01の北側には、S D01との間にはさまれた南北方向が狭い平坦地に、東西方向に長大なS B01(14間×2間)がある。やはり床束を備えている。S X02以南は、北半部に比べると柱穴数がやや少なくなり、建物のない空地がやや目立つ。また、柱穴掘形の規模もやや小さくなる傾向がある。この調査区南半部は、東西方向の柵を伴う浅い溝や段によって、さらに小区画に分離されているようである。建物自体は小規模で、北半部の建物群に対する付属的な施設と考えられる。これらの建物群の周囲を取り巻く溝は、東側を除く3方で、



第1図 調査地位置図(1/100,000)



第2図 遺構平面図(1/500)・SK01出土遺物実測図(1/7.5)

部分的に確認している。いずれも、丘陵平坦部縁辺の傾斜変換点付近を1段掘り下げて段状に加工している。また、これらの溝(段)は直線的で、建物群全体を矩形に囲画しているようである。敷地を保護するもの、あるいは、敷地を区画するものと解釈できる。

まとめ 今回の調査成果のうち、奈良時代については、多くの遺構が削平された状況が判明した。ただ、出土遺物中に祭祀色の高いものが目立って多い点や、調査区の西に面する釜ヶ谷遺跡で同種の遺物が多量に出土していることから推測すると、律令的祭祀と結びつく遺構がかつて存在したことをうかがわせる。

一方、江戸時代の遺構に

については、様々な状況から判断して、一過性の高い非日常的性格を読み取れる。また、造成を加えて敷地を確保していることや、建物規模が大きいことから農林業に関わる施設とも考えにくい。その性格の一案を示すと、南都諸寺院の建造物修築等に関わる用材の管理運営施設(木屋)が考えられないだろうか。たとえば、江戸期における東大寺大仏殿再建のおり、その材木の多くが木津川舟運を経て木津で陸揚げされ、そこから陸路南都まで寄進引きと称する大勢の人夫が動員され運送した様子が記録に残されている。今回検出された建物群は、その構造から用材を加工する施設(作事場)とみるよりは、むしろ木引工の宿営施設と推測するのがふさわしいと考えられる。

(伊賀高弘)

## 15. おお はた 大 畠 遺 跡

所在地 相楽郡木津町大字相楽小字岸間堂地内

調査期間 平成10年6月23日～10月2日

調査面積 約1,100m<sup>2</sup>

はじめに 大畠遺跡は木津町の平野部の西南に位置し、奈良県との府県境に近接している。昭和57年に相楽台ニュータウンの造成中に銅鐸が発見され、その際に大畠遺跡の存在が明らかとなった。2次にわたる発掘調査の結果、弥生時代中期の集落跡、奈良時代の掘立柱建物群、古墳時代中期～後期の土坑が検出された。今回の調査は、国道24号京奈道路が大畠遺跡の北東部に計画されたことから、建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所の依頼を受けて実施した。

調査概要 調査によって、掘立柱建物跡9棟、竪穴式住居跡1基、土器棺墓2基、流路2条を検出した。このうち、掘立柱建物跡1～3は、段状に田畑が形成された以後の建物と考えられる。掘立柱建物跡5～10および竪穴式住居跡4の柱穴群からは、わずかながらも、古墳時代後期(6世紀末～7世紀前葉)の須恵器が出土している。調査地の東端部でも多くの柱穴を検出したが、調査範囲が狭いために、建物に復元できるものは確認できなかった。流路11は、自然の流路で、幅約7m、最大の深さ約1.2mで、堆積土からは、須恵器片とともに、縄文土器(晩期)が出土した。流路12は、調査地の東部で検出した流路跡で、幅約30mにわたってゆるやかに下って流路跡を形成している。埋土中には、弥生時代中期～古墳時代後期の遺物が含まれていた。土器棺13は布留式甕を、土器棺14は弥生時代中期の甕を埋納したもので、土器棺と判断される。

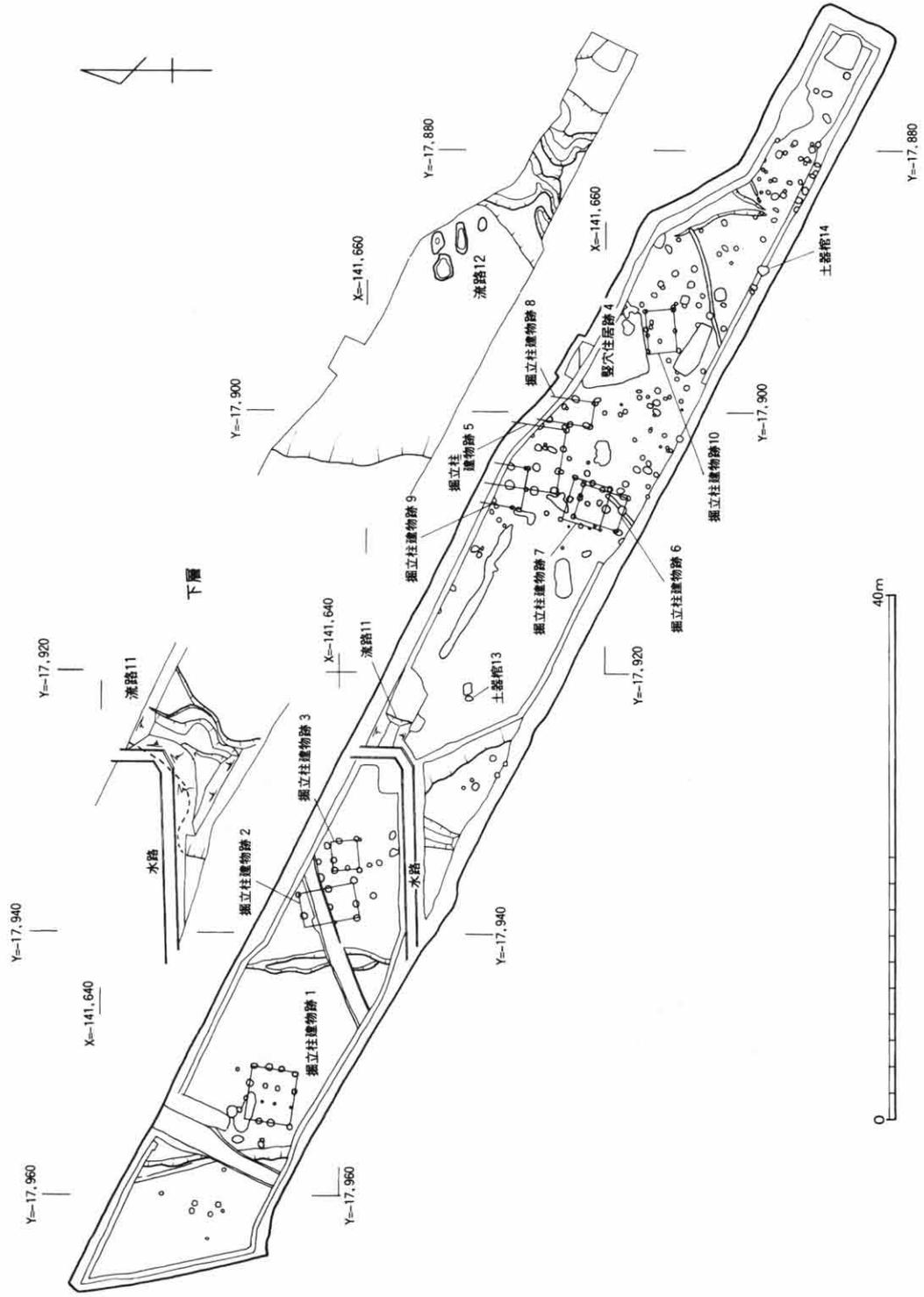
まとめ 今回の調査地は大畠遺跡の北東に位置し、従来知られていなかった古墳時代後期の集落遺構を検出した。また、古墳時代初頭から後期前葉にかけて土器が多く出土したことや、流路11から縄文土器が出土したことから、隣接してそれらの時期の集落の存在が推測される。



第1図 調査地位置図(1/25,000)

掘立柱建物跡5・6・7を西限として、古墳時代後期後葉の遺構が急に分布しなくなる点に着目すると、流路11の東側に近接して古墳時代初頭の甕棺が検出され、さほど削平を受けていないと考えられる。そうすると、同時期の遺構はこの西側には元から分布せず、そこに空地と建物を有機的に配置した様相を認めるならば、有力者の「屋敷地」であったとも考えられる。また、竪穴式住居に対する掘立柱建物の比率が高く、集落構造の変化を考える上で、重要な調査となった。

(岩松 保)



第2図 検出遺構平面図

## 資料紹介

# 恭仁宮跡北面大垣出土「東」銘文字瓦について

永澤 拓志

## 1. はじめに

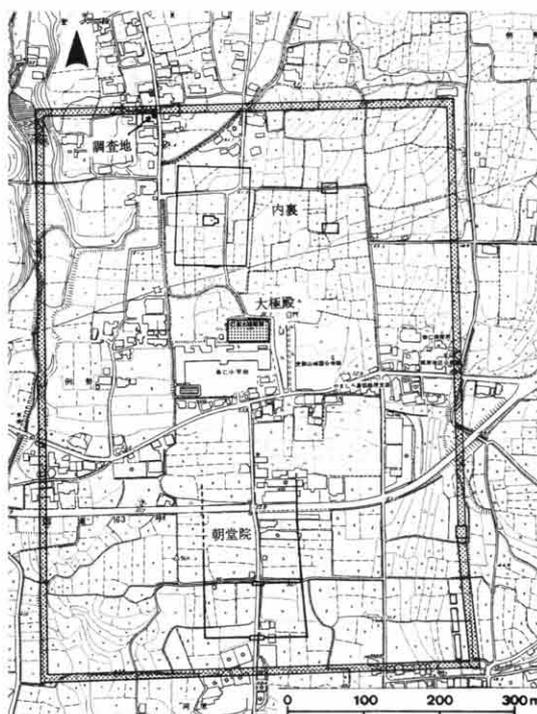
京都府の最南端、相楽郡に所在する加茂町は、ほぼ中央を東西に木津川が流れ、町域を大きく南北に分ける。その北半部に位置する瓶原地域(加茂町大字例幣等)は、木津川に向かって北から南に緩やかに低くなる平坦な地形を呈しており、古くから人々の生活が営まれた場所である。現在のところ加茂町内で最古の旧石器が発見された例幣下層遺跡から始まり、縄文時代から中世に至るまでの各期の遺跡が確認されている。そして、天平12(740)年から16(744)年にかけて、当地には、聖武天皇により恭仁宮が営まれた。

京都府教育委員会並びに加茂町教育委員会では、昭和48年度以来、宮跡に係る発掘調査を継続して進めている。京都府教育委員会は主として宮の中心部分の確認や宮の範囲を確定することを目的として調査を進め、加茂町教育委員会は主に推定範囲内の民家の小規模開発に伴う発掘調査を行っている。こうしたなか、平成8年度に京都府教育委員会によって宮の周囲を巡る大垣の南西コーナーが確認され、宮跡の四周が確定されたことは記憶に新しいところである(第1図)。

その後、平成10年2月に、宮跡の北面築地想定線上に位置する建物の改築に伴う発掘調査を、加茂町が実施した(第1図)。調査の結果、想定どおり北面大垣と考えられる築地状遺構およびそれに伴う南側溝を検出することとなったが、このうち南側溝から出土した平瓦片に恭仁宮跡で初出になる線刻の「東」銘をもつ瓦が認められた。<sup>(注1)</sup> 恭仁宮跡から多くの文字瓦が出土することは周知のとおりであるが、その大半はスタンプ式のものであり、線刻による文字が確認されていたのは「大」と刻まれた例が認められるにすぎなかった。<sup>(注2)</sup> そこで、本稿では、この「東」銘文字瓦を資料紹介するとともに、若干の検討を加えてみたい。

## 2. 調査の成果

調査では、北面大垣の確認を目的としてトレンチを設定した。その結果、北面大垣はトレンチ北



第1図 調査地位置図

端部分で検出され、その南で大垣に伴う南側溝を確認した(北側溝は調査区外)。溝幅は2.1~2.4mを測り、東銘文字瓦は、この溝の底部付近から軒丸瓦・軒平瓦を含む古瓦類と共に出土した。

なお、軒丸瓦は3点あり、1点が恭仁宮瓦型式でKM04A(平城宮型式6284E)、残りの2点がKM04B(平城宮型式6284C)である。軒平瓦は4点あり、すべて恭仁宮瓦型式でKH01型式軒平瓦(平城宮型式6691A)である。溝内の出土遺物は古瓦類のみで、土器などは認められなかった。

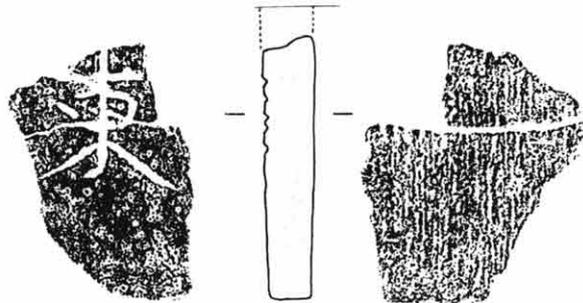
### 3. 「東」銘文字瓦について

「東」銘文字瓦は、出土瓦類の整理段階で確認した。一見、15cm×20cm程度の長方形をなす平瓦片で、厚さは2.8cmある。この厚みは、同じく出土した平瓦が15cm程度の厚みをなすののに対し明らかに厚手といえ、軒平瓦の一部である可能性が極めて高いと考えている。文字は、縦横約7cm四方の大きさで、凹面挟端部寄りの中央付近に、字頭を広端面に向けて刻まれている。凸面には縦位の縄叩きが確認される。

このヘラ書き文字瓦「東」については山中章氏が『長岡京古瓦聚成』<sup>(注3)</sup>で出土例をまとめ、そこでは、文字瓦「東」がA・B・Cと筆跡により、3タイプに分類される(第3図)。

A 文字が直線的で硬く、丁寧に刻んでいる。緊張感漂う。

B 文字の第3画と第4画にやや丸みが

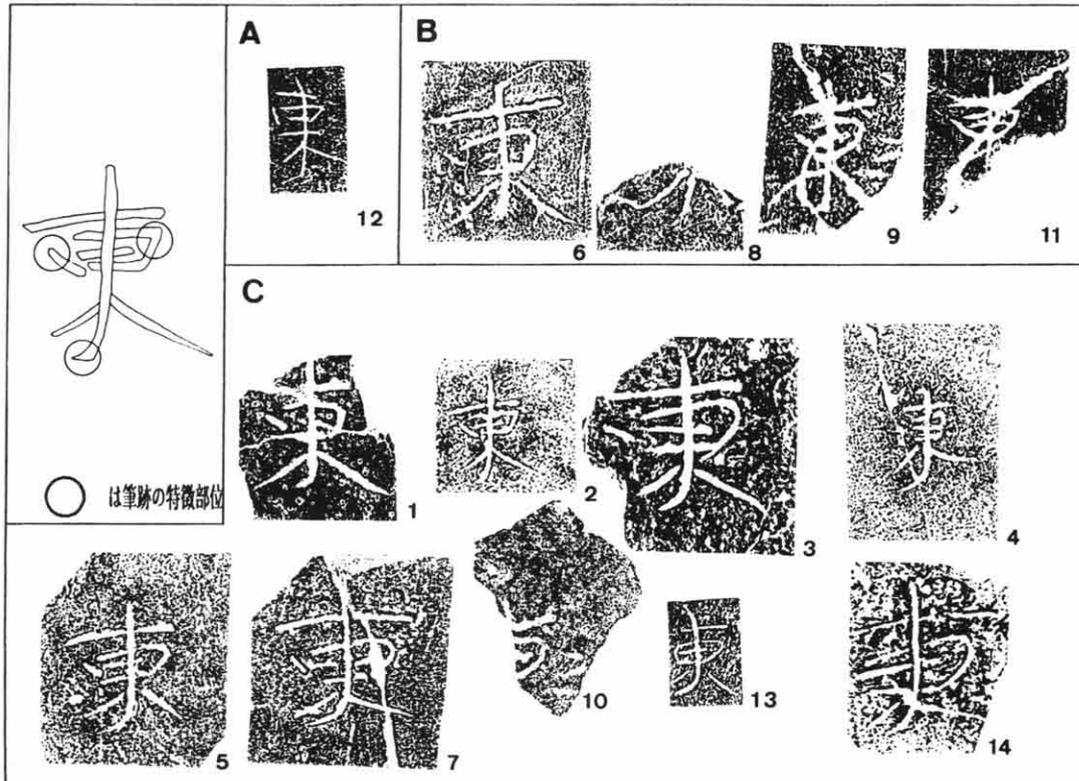


第2図 恭仁宮跡出土「東」銘瓦拓影

付表 「東」銘文字瓦出土地一覧表(山中 章氏論文付表3に加筆)

	遺跡名	出土地・推定地	厚み (mm)	筆跡	文献	型式 No.
1	恭仁宮跡	宮北面大垣に伴う南側溝	28	C	『恭仁宮(京)跡発掘調査概要1998』(加茂町教育委員会)	
2	長岡宮跡	第2次内裏北外郭	22	C	『埋蔵文化財発掘調査概報1970』(京都府教育委員会)	6664D
3	平城宮跡	松林苑南面築地付近表採(第4次調査)	30	C	「松林苑跡I」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第64冊(奈良県立橿原考古学研究所)	
4	〃	松林苑西面築地に伴う東西溝(第9次調査)	24	C	〃	
5	〃	〃	30	C	〃	
6	〃	〃	22	B	〃	6689
7	〃	〃	27	C	〃	6664G
8	〃	〃	18	B	〃	
9	〃	〃	16	B	〃	
10	〃	〃	28	C	〃	
11	〃	〃	15	B	〃	
12	〃	第1次大極殿SC5500		A	『平城宮発掘調査報告』X I(奈良国立文化財研究所)	6664F
13	〃	第2次内裏北外郭		C	『平城宮跡発掘調査報告』VII(奈良国立文化財研究所)	6689
14	平城京跡	左京四条二坊七坪		C	『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和58年度』(奈良市教育委員会)	

※この他に、法起寺・毛原廃寺で6689型式の軒平瓦が確認されている。



第3図 「東」銘瓦集成図(1/4)

出、第4画のはねは短い。

C いずれの画も丸みを帯び、第4画に至っては極端に丸く、先端が長くなる。

ここでは、その後の出土例に今回の例を加えて、文字タイプと出土状況を比較してみたい。

まず、上記の山中氏の基準に従えば、恭仁宮出土例はCタイプに属するものと判断される。そして、本例の大きな特徴として、第5画の横線が非常に確認しにくい点や、第1画の横線の最後が上方にはねる点を指摘できるが、これと同様の特徴をもつ文字例は松林苑、および長岡宮跡出土瓦中に4点認められる(第3図2・5・9・10)。

文字の大きさといった面では、全体を見ると5～9cm四方まで様々なものがあり、本例(縦横7cm四方)はその類例内におさまることが確認される。

瓦の厚みは、大きく2タイプに分類でき、筆跡タイプBは2.2cm以下の瓦に刻まれ、Cは2.2cm以上の瓦に刻まれていることがわかる。恭仁宮跡出土例の厚みは前述のとおり2.8cmを測り、これが筆跡Cタイプに属することは、こうした傾向に矛盾しないといえる。ちなみに、今回の調査で同時に出土している軒平瓦の厚みは2.3cm前後であり、本例はこれより厚手である。このことは、先に記したように、本例が軒平瓦の一部であるとの想定を、より補強するものと思われる。

一方、各類例の多くは破片資料であるが、中に軒平瓦も確認されている。型式分類では、平城宮跡第1次大極殿院地区東面築地回廊S C 5500出土の6664 F型式、平城宮跡内裏地区北外郭出土の6689型式、松林苑西面築地東西溝出土6664 Gおよび6689型式が現在までの確認例である。

今、各類例の出土場所とその使用年代に関して概観してみると、今回恭仁宮跡で出土した文字瓦は北面大垣に葺かれていたものであり、おそらく、それが廃都後に溝内に廃棄されたと考えら

れる。平城宮跡第1次大極殿院地区の東面築地回廊S C 5500出土瓦は、それが造営され始めた和銅年間(708)以降に使用され、天平勝宝5(753)年に廃棄されたと考えられる。平城宮跡内裏地区北外郭出土の6689型式は他の内裏地区出土瓦との比較から、およそ養老5(721)年以降に使用され、平城遷都(745)頃からの内裏外郭を掘立柱から築地回廊に改築した年代が廃棄と考えられる。松林苑外郭西面築地東西溝出土6664 F および6689型式については、松林苑が第2次内裏東外郭地域および第2次朝堂地域と同時期に築造され、765年頃に崩壊したと考えられている。第2次内裏東外郭地域の造営時期は神亀元(724)年頃と考えられ、およそ724~765年の間がその使用時期であろう。なお、長岡宮跡第2次内裏北外郭出土6664 D 型式は、平城宮から運ばれたと考えられる。

以上のことから「東」銘軒平瓦は、8世紀前半~中頃にかけて、平城宮・京および関連施設建設に伴い製作され、その使用も遷都に伴って運ばれた長岡京跡出土例を除き、765年頃までに限られたものであることが確認される。

#### 4. おわりに

まず、この「東」銘文字瓦については、確認されている軒平瓦例などからみて、概ね8世紀前半から中頃にかけて平城宮・京および関連施設建設に伴って生産されたものと考えられた。恭仁宮跡出土例については、平城宮からの搬入品もしくは、恭仁宮造営に際して新調した瓦のどちらかであるが、いずれにしても上記の性格は満たしているといえるだろう。

なお、本例はその厚みから軒平瓦と考えられるが、「東」銘文字が刻まれる軒平瓦型式(6664 D・6664 F・6664 G・6689の4種類)の内では、6664 F 型式のみがこれまでの調査で出土しており、瓦当文様が不明なために特定は難しいものの、本例もこの型式の可能性が高いと思われる。

最後に、「東」銘瓦は、従来から認識されている恭仁宮式文字瓦とは全く異質のものであり、そこから考察されている生産工人によるものとは別のもの<sup>(注4)</sup>といえる。それは軒平瓦および平瓦だけにヘラで刻まれ、出土数が少ない点などによる。これらから、文字の性格としては、生産場所でのなんらかの点検を示すもの(生産場所を示すとともにそこで生産されたことをチェックしたもの)、供給先(使用場所もしくは、使用部署等)を特定したものなどが可能性として考えられる。現状ではその判断は難しいが、出土例を概観すれば、供給先が数か所にわたっていることが認められ、後者、すなわち生産場所での何らかの点検等を意図として刻まれたと考える。

以上、1点のみの出土品で、恭仁宮でのその瓦の性格等を検討することは無理であるが、ここでは、調査結果として宮北面大垣を確認し、それに伴って「東」銘文字瓦が出土したことに注目し、その報告を行った。末筆ではありますが、資料の観察方法をはじめ検討内容等について、様々な御教示並びに御指導をいただいた大脇 潔・上原真人の両氏には記して御礼申し上げます。

(ながさわ・たくし=加茂町教育委員会)

注1 永澤拓志「恭仁宮(京)跡発掘調査概要」(『加茂町文化財調査報告』第15集 加茂町教育委員会) 1998

注2 『恭仁宮跡発掘調査報告』瓦編 京都府教育委員会 1984

注3 山中 章ほか『長岡京古瓦聚成』(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第20集 向日市教育委員会) 1987

注4 注2において、上原真人氏が指摘。

## 研究ノート

## 愛宕神社1号墳の中国鏡について

竹井治雄

## 1. はじめに

京都府竹野郡弥栄町に所在する愛宕神社1号墳から出土した銅鏡については、既に平成9年度『京都府遺跡調査概報』第83冊、『京都府埋蔵文化財情報』第66号に報告しており、墳丘や主体部の出土状況について、詳しく言及した。しかし、銅鏡の復原に関して誤認があった。そのため『概報』・『情報』の銅鏡の報告文は、本文を修正し、復原写真を撮り直す必要が生じた。

そこで、今回あらためて観察し直してみると、銘文もより具体的に判読することができた。また、主文の絵柄は今もなお不明な点が多いものの、再観察した結果、「獸形鏡」であることには変わらない。また、鏡式・銘文等から見て「中国鏡」という判断も変わらない。本稿では、改めて観察した結果を詳しく記述し、新たな写真(巻頭図版第3)・実測図を掲示するものである。

## 2. 銅鏡の出土状況

愛宕神社1号墳は、平成9年度に丹後国営農地開発事業に伴って発掘調査を実施した。古墳は、一辺約20m・高さ1.6mを測る、古墳時代前期末に築かれた方墳である。主体部は、墳丘中央やや東寄りに南北に主軸を持つ木棺を直葬している。墓壙は南北7.0m・東西2.7m・深さ1.0mを測る二段墓壙であった。木棺は、長さ6.0m・幅0.6~0.65mを測る組合式箱形木棺で、3枚の仕切り板によって、2室(それぞれの長さ1.9m)を設ける。この内、北側の部分に、北頭位で被葬者を埋納した空間がある。

この北室を中心として、多くの遺物が出土した。頭部には朱、大小3点の豎櫛が取り巻いている。東側板には鉄剣が置かれ、切先を南に向けている。棺の北東隅には勾玉・管玉10個、北西隅にはガラス玉が仕切り板を越えて散在する。北仕切り板の外側に鉄斧・鉄鎌、南仕切り板の外側には鉄剣・豎櫛・刃子がある。

銅鏡は主室の南東隅、仕切り板に密着して出土した。銅鏡は8片に破碎され、重ね合わせて立て掛けられていた。

出土遺物は装飾品・生産具・武器・威信財等、多彩であるが、原位置を保っているとすれば、埋納して、首長霊を継承する儀礼の所産であると思われる。ガラス玉は装飾品であるにもかかわらず散在している。おそらく何らかの儀礼に伴うものではないだろうか。古墳時代前期の銅鏡の多くは普通頭部を中心に側面に埋納されるものが普通だが、本例では破碎されて足元の棺隅にあることから、首長権の継承儀礼と関連するものと推測できる。

### 3. 銅鏡

#### 斜縁四獣形鏡

径12.5cm、面の反りは破損のため不明である。青銅質を呈しており、厚さ1mmの薄手づくりである。鋳上りは、青灰色の緑錆のばらつきが見られ良好とは言えない。

図文は全体的に肉彫りが薄く、人為的に割られた鏡であるため歪みが見られる。鏡面は精緻に磨かれ、なめらかである。鏡背の構成は内区に鈕・乳・主文・銘帯がある。櫛歯文の界線を境にして外区には鋸歯文帯・U字形文帯が細い突線で分かれる。縁は稜線が丸味を帯びた斜縁である。

**内区** 主文部の鈕は直径2cm(鈕座径3cm)・高さ1.1cm、鈕孔は偏平な楕円形を呈し、長軸1cm・短軸4mmを測る。比較的まとまった紐と言え。乳は鈕の中心から2.5cmの位置に4個配される。各乳間に獣形が描かれる構図である。図像は欠損が著しく、肉彫りも弱いので、判読が非常に困難であるが、最もよく残るA区では、虎の足・胴が左方向に向き、頸が大きく反り返り頭が右に向いている。B区の右端には獣の尾、背と思われる文様が見られる。C区は右側に足、A・B区の背・肩部分と似た文様が見られる。D区は右側に尾、後足、左側に前足らしき文様が見える。おそらく同向式の文様であり、虎を含む四獣形鏡と思われる<sup>(注1)</sup>。

銘帯は幅0.6cm、細い突線で区画される。低い肉彫りで記され、反時計回りに5文字解読できる。錆により一部欠失しているが、文字の間隔から推定7文字で完結するものと思われる。

□ □ 作 竟 (鏡) 自 有 己 (紀)

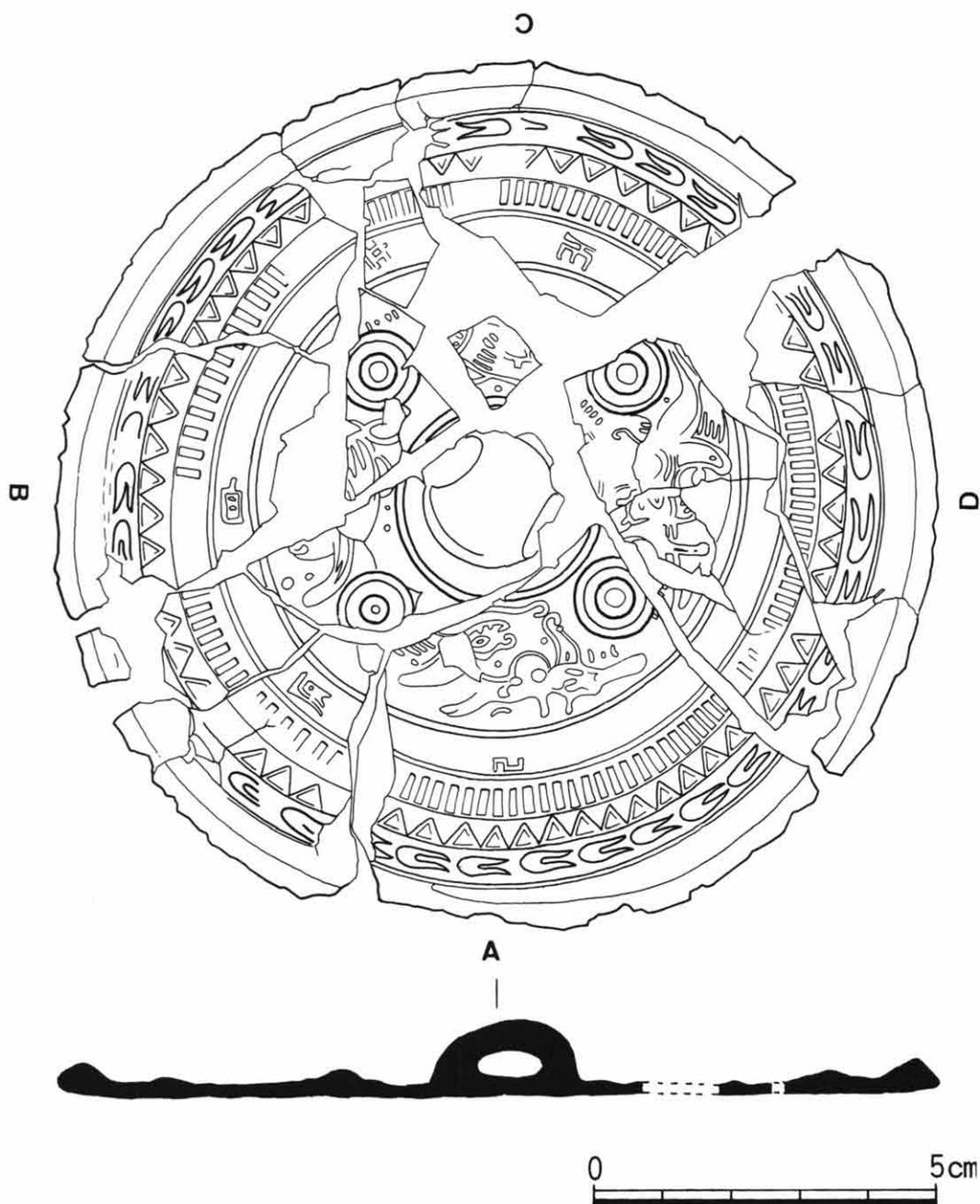
□□鏡を作る、自から紀すること有り

銘文の「作」は逆字、「竟」は金偏を省略、「有」は簡略化、「己」は糸偏を省略している。

□□は「作竟自有己」の巻頭にあたることから、例として「蘇氏」「許氏」「蔡氏」「李氏」「盖氏」「上方」「吏氏」「瞿方」「三羊」「尚方」等が挙げられる<sup>(注2)</sup>。ただ、これらは七言で完結することではなく、多くは三～四句続くものであるが、本銅鏡は銘帯にあって、一句で終わるものとしては稀である。少ない文字数は擬銘帯によく見られる。

「吾」が用いられている<sup>(注3)</sup>とも考えられるが、この場合斜縁四獣鏡・三頭式盤龍鏡・獣文縁神獸鏡等に見られるように、「吾作明竟自有己・・・」と記されることが多く、文字の間隔からいっても可能性は低い。「盖方」「三羊」は神人神獸鏡、神人鳥獸画像鏡にみられる。「吏氏」は龍虎鏡や後漢後期の二虎対峙鏡がある。「尚方」は紹興出土の後漢鏡の銘の一部にある。

**外区** 櫛歯文帯は幅5mm、櫛歯の幅は1mmを測り、整然と肉彫りされている。鋸歯文帯は幅4mmを測る。その区画は圏線によるものではなく、段差をもってなされており、歯先がU字形文帯に及んでいるところもある。鋸歯文は一辺4mmのほぼ正三角形を呈している。肉彫りも厚く明瞭な仕上がりである。U字形文帯は幅4mmを測り、斜縁との間に細い界線を施して区画されている。文様は右に丸くおさめ、左は2本に分かれ、先端は鋭利である。よく見ると、肉彫りされた個々のU字形文は端正であるが、大きさ、形が微妙に違う。斜縁は、稜線が丸みを帯び、若干偏平な感じである。



第1図 愛宕神社1号墳出土斜縁四獣形鏡実測図

#### 4. おわりに

本銅鏡は次の3点に大きな意味をもつものとする。(1)破砕された状態で被葬者の足元から出土したこと、(2)銘文が後漢鏡を踏襲したものであるにもかかわらず、一句だけで完結すること、(3)U字形文は類例がなく特異な文様であること、が特徴づけられる。

(1)については、古墳時代前期末の棺内の豊富な出土遺物とその位置から、葬送・埋納・首長権継承といった諸儀礼の痕跡がうかがわれ、本鏡はそれらの儀礼の中で用いられたものと思われる。(2)については、銘文は盤龍鏡・龍虎鏡など魏鏡に一般的なものである。しかし欠失した文字について、文字数が二文字であること、擬名帯に用いていることから、「尚方」「吏氏」等が推

定される。(3)は、例えば楽浪郡大同江面出土の四乳四獸鏡<sup>(注4)</sup>に見られる連渦文が変化したものか、或いは逆にU字形文が渦卷文に変化したものとする。

最後に本鏡を復原するにあたり、当調査研究センターの樋口隆康理事長に多くのご教示をいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

(たけい・はるお=当センター調査第2課第1係主査調査員)

参考文献 樋口隆康 『古鏡』 新潮社 1979

注1 「久津川車塚」の四獸形鏡に類例がある。

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターほか『鏡と古墳』 1987に所収の234～237の鏡。

注2 「蘇氏作竟自有己……」 『歴代銅鏡』 国立歴史博物館 台北市 1996

「許氏作竟自有己……」 『歴代銅鏡』 国立歴史博物館 台北市 1996

「蔡氏作竟自有己……」 『歴代銅鏡』 国立歴史博物館 台北市 1996

「吏氏作竟自有己……」 二虎対峙鏡・龍虎鏡 『中国銅鏡図典』 文化出版社 1992

「盖氏作竟自有己……」 神人神獸鏡 陳 佩芬『上海博物館藏青銅鏡』 1960

「上方作竟自有己……」 半肉彫四獸鏡 樋口隆康『古鏡』図録 新潮社 1979

「瞿方作竟自有己……」 人物画像鏡 後藤守一編『古鏡聚英』上編 東京堂出版 1935

「三羊作竟自有己……」 三角縁盤龍座画像文帯鏡 『鄂城漢三国六朝銅鏡』 人物出版社・古代学研究会 1986

「尚方作竟自有己……」 東漢龍虎鏡 『浙江出土銅鏡』 文化出版社 1957

注3 「吾作明鏡自有己……」 斜縁四獸鏡 樋口隆康『古鏡』図録 新潮社 1979

「吾作明鏡自有己……」 三頭式盤龍鏡(三龍鏡) 『浙江出土銅鏡』 文化出版社 1957

「吾作明鏡自有己……」 獸文縁神獸鏡 後藤守一編『古鏡聚英』上編 東京堂出版 1935

注4 「四乳四獸鏡」 径4寸1分4厘 関野 貞・谷井濟一ほか『楽浪郡時代ノ遺跡』(下) 朝鮮総督府 1925に所収の1320の鏡

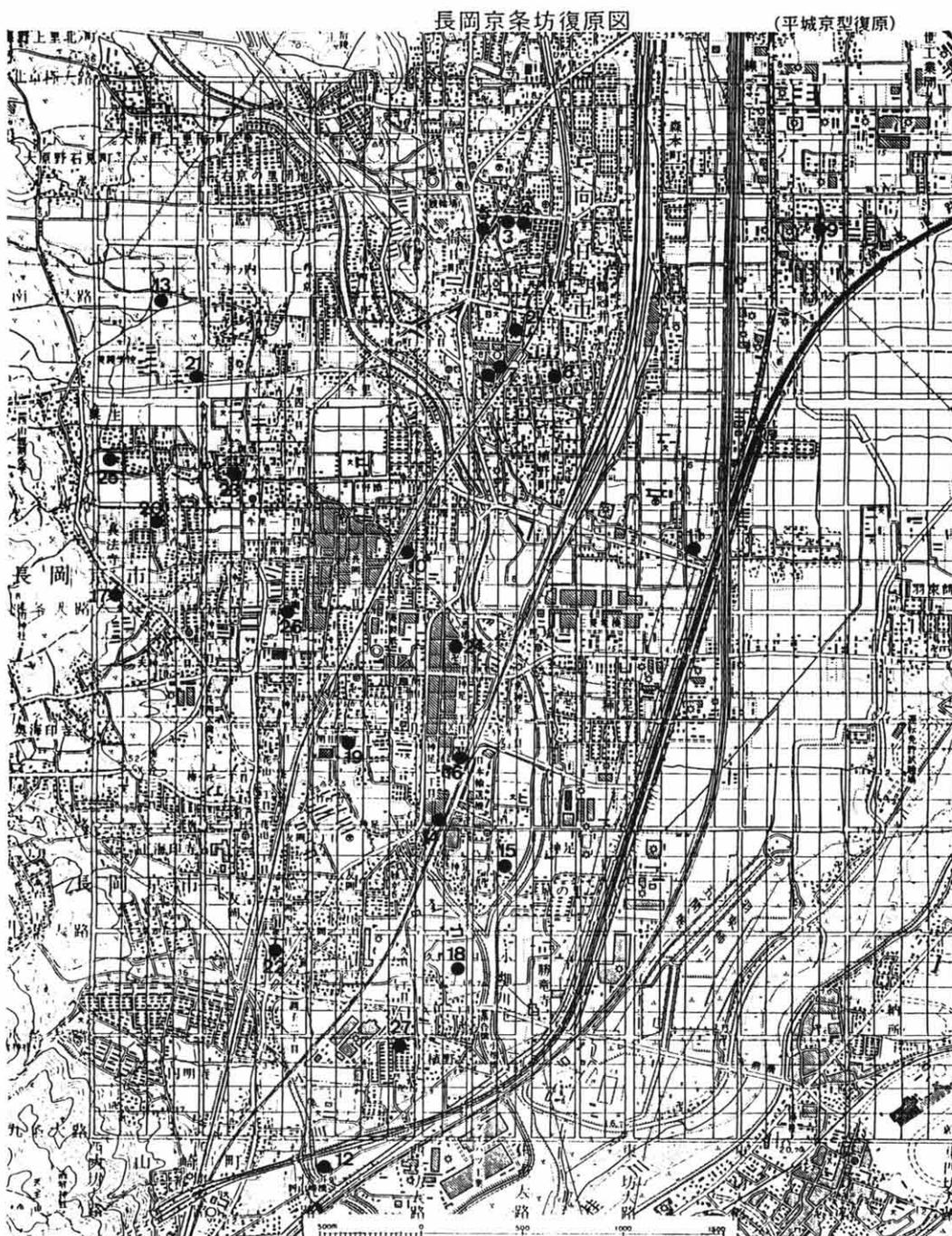
## 長岡京跡調査だより・67

前回『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成10年8月26日、9月24日、10月28日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は宮内7件、左京域3件、右京域16件であった。京外の9件を併せると35件となる(調査地一覧表と位置図を参照)。

調査地一覧表 (1998年10月末現在)

番号	調査回数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第362次	7ANFOC-6	向日市上植野町御塔道7-2	(財)向日市埋文	7/14~8/8
2	宮内第363次	7ANEYT-6	向日市鶏冠井町山畑19-6	(財)向日市埋文	7/29~7/31
3	宮内第364次	7ANEHN	向日市寺戸町東ノ段30-6.30-18.30-19	(財)向日市埋文	7/30~8/31
4	宮内第365次	7ANBHN-2	向日市寺戸町東ノ段30-20	(財)向日市埋文	8/31~9/8
5	宮内第366次	7ANBNK	向日市寺戸町中ノ段11	(財)向日市埋文	8/31~9/4
6	宮内第367次	7ANFMK-14	向日市上植野町南開34-3	(財)向日市埋文	9/18~10/6
7	宮内第368次	7ANFOC-7	向日市上植野町御塔道2-31他	(財)向日市埋文	10/20~10/26
8	宮内第369次	7ANBHS-1	向日市寺戸町東田中瀬15-18・37	(財)向日市埋文	10/26~
9	左京第418次	7ANVKC-1	京都市南区久世東土川町178他	(財)京都市埋文研	6/15~
10	左京第419次	7ANFHM-7	向日市上植野町橋爪1-5	(財)向日市埋文	7/3~7/21
11	左京第420次	7ANFKI	向日市上植野町北淀井3-1.3-2	(財)向日市埋文	10/13~11/25
12	右京第589次	7ANSKT-3	大山崎町下植野門田地内	(財)京都府埋文	4/13~
13	右京第605次	7ANGMM-1	長岡京市井ノ内宮山8番地他	(財)長岡京市埋文	5/25~9/14
14	右京第606次	7ANMBZ-1	長岡京市神足二丁目5	(財)長岡京市埋文	6/3~9/10
15	右京第608次	7ANMKI-8	長岡京市東神足二丁目6.7-2.7-3	(財)長岡京市埋文	6/8~7/15
16	右京第609次	7ANMSM-1	長岡京市神足一丁目317	(財)長岡京市埋文	6/9~8/3
17	右京第611次	7ANHFC-3	長岡京市生田内15-1	(財)長岡京市埋文	7/13~7/23
18	右京第612次	7ANQSE-3	長岡京市久貝二丁目116-1	(財)長岡京市埋文	7/15~8/7
19	右京第613次	7ANKNT-3	長岡京市開田四丁目616-1.618	(財)長岡京市埋文	8/3~8/12
20	右京第614次	7ANJMM-2	長岡京市長法寺南野26-1他3筆	(財)長岡京市埋文	8/20~9/8
21	右京第615次	7ANIHJ-5	長岡京市今里蓮ヶ糸406	(財)京都府埋文	9/10~
22	右京第616次	7ANNSN-6	長岡京市友岡4丁目18-1	(財)長岡京市埋文	9/7~99.1/14
23	右京第617次	7ANINC-9	長岡京市今里5丁目328の1他9筆	(財)長岡京市埋文	10/2~10/31
24	右京第618次	7ANLTR-6	長岡京市馬場1丁目17.11-11番地内	(財)長岡京市埋文	9/28~11/11
25	右京第619次	7ANJKK-6	長岡京市長法寺北畠3の1	(財)長岡京市埋文	10/12~11/11
26	右京第620次	7ANKNA-2	長岡京市長岡2丁目233番地の3	(財)京都府埋文	10/22~12/末
27	右京第621次	7ANTMK-9	大山崎町下植野宮脇1の25	大山崎町教委	10/12~10/末
28	右京第622次	7ANLKR	長岡京市馬場2丁目9番地他	(財)長岡京市埋文	10/26~11/24
29	祭ノ神遺跡第3次	8LSJTD-3	長岡京市長法寺谷田9-1他	(財)長岡京市埋文	8/17~9/30
30	南条遺跡第2次	6NJANJ-2	向日市物集女町南条19-1他	(財)向日市埋文	8/3~9/14

31	寺戸大塚古墳第6次	4PTBSM-6	向日市寺戸町芝山2-5.2-6	(財)向日市埋文	6/29~10/30
32	久々相遺跡第4次	7AKBUU	向日市寺戸町瓜生26-1	(財)向日市埋文	10/19~11/27
33	山城国府跡第49次	7YYS' NT-5	大山崎町字大山崎小字西谷2-5	大山崎町教委	5/28~10/上
34	山城国府跡第51次	7XYS' RK15	大山崎町大山崎竜光56	大山崎町教委	9/14~10/2
35	山城国府跡第52次	7XYS' EG-4	大山崎町大山崎竜光56	大山崎町教委	10/5~10/13
36	大藪遺跡		京都市南区久世殿城町	(財)京都市埋文研	7/1~
37	下植野南遺跡	IK25-3	大山崎町下植野五条本	(財)京都府埋文	9/21~



## センターの動向(10.8~10)

1. できごと
8. 4 木村英男常務理事・事務局長、森垣外遺跡(精華町)ほか現地視察
- 6 今福古墳群(宮津市)発掘調査終了(5.18~)
- 11 今林遺跡(園部町)発掘調査開始
- 12 南谷古墳群C支群(久美浜町)関係者説明会、発掘調査終了(5.19~)
- 15 第83回埋文セミナー(別掲)  
第16回小さな展覧会開催(~29日)
- 18 理事協議会(於:当センター)樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事、川上 貢・上田正昭・佐原 眞・足利健亮・都出比呂志・井上満郎・堤圭三郎・中村 彰・西山隆史・中谷雅治各理事出席  
奈具岡遺跡(弥栄町)発掘調査開始
- 25 永留城跡(久美浜町)発掘調査開始  
興戸宮ノ前遺跡(京田辺市)発掘調査開始  
浅後谷南遺跡(B地区)(網野町)発掘調査終了(4.20~)
- 26 長岡京連絡協議会
9. 4 余部遺跡(亀岡市)発掘調査開始
- 10 長岡京跡右京第615次調査・井ノ内遺跡(長岡京市)発掘調査開始
- 11 川上 貢・藤井 学理事、赤ヶ平(菰池)遺跡(木津町)現地視察  
森垣外遺跡現地説明会
- 16 通り谷城跡(峰山町)関係者説明会、発掘調査終了(7.14~)
- 17 大島遺跡(木津町)関係者説明会
- 18 同和問題職場研修(於:大阪人権博物館)  
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於:枚方市)森島康雄・松尾史子調査員出席
- 21 市田斉当坊遺跡(久御山町)発掘調査開始
- 24 長岡京連絡協議会
- 29 下植野南遺跡(大山崎町)現地説明会
- 10.2 木村英男常務理事・事務局長、下植野南遺跡現地視察  
大島遺跡発掘調査終了(6.23~)  
教育職出向職員研修(於:当センター)「古墳とその時代」講師:堤圭三郎理事、米本光徳・竹下士郎主査調査員、中村周平調査員受講
- 6 都出比呂志理事、浅後谷南遺跡現地視察
- 8~9 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於:茨城県)竹原一彦主任調査員、今村正寿・鍋田幸世主事参加
- 13 樋口隆康理事長、木村英男常務理事・事務局長浅後谷南遺跡現地視察
- 14 永留城跡発掘調査終了(8.25~)
- 15 今林遺跡発掘調査終了(8.11~)  
興戸宮ノ前遺跡(京田辺市)関係者説明会
- 16 同和問題職場研修(於:大阪人権博物館)  
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック研修会(於:大津市)『琵琶湖

- から大阪湾に至る水系のつながり』小山雅人課長、田代 弘・伊賀高弘・中川和哉・野島 永・村田和弘調査員参加
- 20 菰池遺跡関係者説明会
- 22 長岡京跡右京第620次調査(長岡京市)発掘調査開始
- 25 浅後谷南遺跡現地説明会
- 28 長岡京連絡協議会
- 29 興戸宮ノ前遺跡発掘調査終了(8.25～)  
菰池遺跡発掘調査終了(7.1～)

## 2. 普及啓発活動

- 8.15 第83回埋文セミナー(於：向日市民会館)『平成9年度京都府内発掘調査について』松尾史子「横枕遺跡の発掘調査について」、筒井崇史「浦入遺跡の発掘調査について」、浜中邦弘氏「白川金色院の発掘調査について」
- 15～29 第16回小さな展覧会開催 (安藤信策)

## 府内報告書等刊行状況一覽(97.11～98.10)

## 発掘調査報告書

- 『埋蔵文化財発掘調査概報』 1998 京都府教育委員会 1998.3  
 『京都文化博物館調査研究報告』 第11集 京都府京都文化博物館 1995.9  
 『京都市内遺跡発掘調査概報』 平成9年度 京都市文化市民局 1998.3  
 『京都市内遺跡立会調査概報』 平成9年度 同上 1998.3  
 『京都市内遺跡試掘調査概報』 平成9年度 同上 1998.3  
 『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』 第16冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997.11  
 『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』 第17冊 同上 1998.3  
 『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 同上 1998.3  
 『平安京跡研究調査報告』 第19輯 (財)古代学協会 1997.3  
 『花園大学構内調査報告』 V 花園大学 1998.3  
 『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』 第4冊 立命館大学文学部学芸員課程 1992.3  
 『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』 第7冊 同上 1998.3  
 『京都府久美浜町文化財調査報告』 第20集 久美浜町教育委員会 1998.3  
 『京都府網野町文化財調査報告』 第12集 網野町教育委員会 1998.3  
 『京都府丹後町文化財調査報告』 第13集 丹後町教育委員会 1997.3  
 『京都府弥栄町文化財調査報告』 第12集 弥栄町教育委員会 1997.11  
 『京都府弥栄町文化財調査報告』 第13集 同上 1998.3  
 『京都府弥栄町文化財調査報告』 第14集 同上 1998.3  
 『京都府大宮町文化財調査報告書』 第12集 大宮町教育委員会 1998.3  
 『京都府大宮町文化財調査報告書』 第13集 同上 1998.3  
 『加悦町文化財調査報告書』 第26集 加悦町教育委員会 1998.3  
 『京都府野田川町文化財報告』 第19集 野田川町教育委員会 1997.3  
 『大江町文化財調査報告書』 第5集 大江町教育委員会 1998.3  
 『綾部市文化財調査報告』 第25集 綾部市教育委員会 1997.3  
 『綾部市文化財調査報告』 第26集 同上 1998.3  
 『八木町文化財調査報告書』 第4集 八木町教育委員会 1998.3  
 『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第41集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 1997.3  
 『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第45集 同上 1997.12  
 『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第46集 同上 1998.3  
 『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』 第10集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1997.6  
 『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』 第11集 同上 1998.3  
 『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』 第12集 同上 1998.3  
 『長岡京市文化財調査報告書』 第38冊 長岡京市教育委員会 1998.3  
 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』 第15集 大山崎町教育委員会 1997.12  
 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』 第16集 同上 1998.3  
 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』 第17集 同上 1998.3  
 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第30集 宇治市教育委員会 1995.3  
 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第35集 同上 1996.3  
 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第38集 同上 1997.3  
 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第39集 同上 1997.3  
 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第41集 同上 1998.3  
 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第32集 城陽市教育委員会 1997.3  
 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第33集 同上 1997.3  
 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第34集 同上 1998.3  
 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第35集 同上 1998.3  
 『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』 第22集 八幡市教育委員会 1997.3

- 『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』 第23集 八幡市教育委員会 1997.3  
『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』 第26集 京田辺市教育委員会 1998.3  
『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』 第27集 同上 1998.3  
『京都府山城町埋蔵文化財調査報告』 第20集 山城町教育委員会 1998.3  
『加茂町文化財調査報告』 第15集 加茂町教育委員会 1998.3

当調査研究センター現地説明会・中間報告資料

現地説明会

- 『浦入遺跡群A地点』 (京埋セ現地説明会資料 No.97-13) 1997.11.7  
『余部遺跡第2次』 (京埋セ現地説明会資料 No.97-14) 1997.11.21  
『茶カス古墳群』 (京埋セ現地説明会資料 No.97-15) 1997.11.27  
『横枕遺跡第2次』 (京埋セ現地説明会資料 No.97-16) 1997.12.12  
『烏谷4号墳』 (京埋セ現地説明会資料 No.97-17) 1997.12.18  
『浅後谷南城跡・浅後谷南遺跡』 (京埋セ現地説明会資料 No.98-01) 1998.1.29  
『内里八丁遺跡第10次』 (京埋セ現地説明会資料 No.98-02) 1998.2.6  
『浦入遺跡群R地点』 (京埋セ現地説明会資料 No.98-03) 1998.2.8  
『森垣内遺跡第2次』 (京埋セ現地説明会資料 No.98-04) 1998.2.20  
『太田遺跡第5次』 (京埋セ現地説明会資料 No.98-05) 1998.2.24  
『城山遺跡・片山古墳群』 (京埋セ現地説明会資料 No.98-06) 1998.2.26  
『川向古墳群第2次』 (京埋セ現地説明会資料 No.98-07) 1998.7.16  
『森垣内遺跡第3次』 (京埋セ現地説明会資料 No.98-08) 1998.9.11  
『下植野南遺跡』 (京埋セ現地説明会資料 No.98-09) 1998.9.29  
『浅後谷南遺跡』 (京埋セ現地説明会資料 No.98-10) 1998.10.25

中間報告資料

- 『井町古墳群』 (京埋セ中間報告資料 No.97-10) 1997.12.17  
『川向古墳群』 (京埋セ中間報告資料 No.98-01) 1998.2.25  
『成勝寺跡・岡崎遺跡』 (京埋セ中間報告資料 No.98-02) 1998.3.13  
『浦入遺跡群O地点』 (京埋セ中間報告資料 No.98-03) 1998.4.11  
『成勝寺跡・岡崎遺跡(2)』 (京埋セ中間報告資料 No.98-04) 1998.5.26  
『内里八丁遺跡』 (京埋セ中間報告資料 No.98-05) 1998.6.10  
『畑ノ前遺跡』 (京埋セ中間報告資料 No.98-06) 1998.6.16  
『桑原口遺跡第4次』 (京埋セ中間報告資料 No.98-07) 1998.6.26  
『橋爪遺跡第5次』 (京埋セ中間報告資料 No.98-08) 1998.7.3  
『長岡京跡右京第589次』 (京埋セ中間報告資料 No.98-09) 1998.7.22  
『南谷古墳群C支群』 (京埋セ中間報告資料 No.98-10) 1998.8.12  
『通り谷城跡』 (京埋セ中間報告資料 No.98-11) 1998.9.16  
『大島遺跡第3次』 (京埋セ中間報告資料 No.98-12) 1998.9.17  
『興戸宮ノ前遺跡』 (京埋セ中間報告資料 No.98-13) 1998.10.15  
『菰池遺跡』 (京埋セ中間報告資料 No.98-14) 1998.10.20

府内現地説明会資料

- 『元京都市立竹間小学校跡地』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1998.3.14  
『平安京左京北辺四坊』 同上 1998.6.13  
『物集女城跡第5次調査』 (財)向日市埋蔵文化財センター 1998.6.15  
『武者ヶ谷1号墳』 福知山市教育委員会 1998.7.18  
『長岡京跡右京第606次・神足遺跡』 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1998.8.22  
『谷垣3号墳』 京都府教育委員会 1998.9.2

その他の雑誌・報告・論文等

- 『京都府埋蔵文化財情報』 第66号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997.12  
『京都府埋蔵文化財情報』 第67号 同上 1998.3

- 『京都府埋蔵文化財情報』 第68号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1998.6  
『京都府埋蔵文化財情報』 第69号 同上 1998.9  
『京都府遺跡調査概報』 第78冊 同上 1997.12  
『京都府遺跡調査概報』 第79冊 同上 1997.12  
『京都府遺跡調査概報』 第80冊 同上 1998.3  
『京都府遺跡調査概報』 第81冊 同上 1998.3  
『京都府遺跡調査概報』 第82冊 同上 1998.3  
『京都府遺跡調査概報』 第83冊 同上 1998.3  
『京都府遺跡調査報告書』 第24冊 同上 1998.3  
『第16回 小さな展覧会』 同上 1998.8  
『京都の文化財』 第15集 京都府教育委員会 1998.1  
『文化財保護』 No.15 同上 1998.1  
『土地分類基本調査』 京都府 1987.9  
『朱雀』 第9集 京都府京都文化博物館 1997.3  
『ヒトの来た道』 同上 1997.11  
『資料館紀要』 第26号 京都府立総合資料館 1998.3  
『総合資料館だより』 No.114~117 1998.1~1998.10  
『和鏡』 京都国立博物館 1997.3  
『平成8年度 京都国立博物館年報』 同上 1998.3  
『研究紀要』 第4号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1998.3  
『京都市の文化財』 第15集 京都市文化市民局 1998.2  
『京都市文化財だより』 第29・30号 同上 1998.8~1998.10  
『京都市考古資料館年報 平成5・6年度』 京都市考古資料館 1995.3  
『京都市考古資料館年報 平成7・8年度』 同上 1997.3  
『洛中桃山陶器の世界』 同上 1998.3  
『リーフレット京都』 No.71~114 同上 1994.12~1998.6  
『京都市の文化財』 第10回 京都市歴史資料館 1998.5  
『京都市歴史資料館紀要』 第14号 同上 1997.3  
『京都市歴史資料館紀要』 第15号 同上 1998.3  
『京都市所有の国宝・重要文化財』 同上 1998.9  
『京都市周辺の地震災害危険度マップの作成』 植村善博 1998.5  
『京都大学構内遺跡調査研究年報』 1994年度 京都大学埋蔵文化財研究センター 1998.3  
『第48トレンチ』 京都大学考古学研究会 1997.11  
『弘明集研究 卷中』 京都大学人文科学研究所 1974.3  
『立命館大学考古学論集』 I 立命館大学考古学論集刊行会 1997.12  
『京都橘女子大学研究紀要』 第24号 京都橘女子大学研究紀要編集委員会 1997.12  
『Tachibana Being』 Vol.11・13 京都橘女子大学 1998.1~1998.9  
『佛教大学総合研究所紀要』 第5号 佛教大学総合研究所 1998.3  
『佛教大学総合研究所紀要』 別冊 同上 1998.3  
『佛教大学総合研究所報』 第13・14号 同上 1997.12~1998.6  
『文学部論集』 第82号 佛教大学文学部 1998.3  
『京都府登録有形文化財 松尾神社表門修理工事報告書』 宗教法人 松尾神社 1997.3  
『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告』 舊嵯峨御所大覚寺 1997.3  
『秀吉と京都』 豊国会・豊国神社 1998.5  
『泉屋博古館紀要』 第十四巻 泉屋博古館 1998.3  
『泉屋博古館紀要』 第十五巻 同上 1998.9  
『史迹と美術』 第679~688号 史迹美術同致会 1997.11~1998.9  
『古代文化』 第49巻第11・12号、第50巻第1~10号 (財)古代学協会 1997.11~1998.10  
『土車』 第84~87号 同上 1997.10~1998.7  
『東国古代学』 第2号 同上 1997.12  
『茶道雑誌』 第62巻第8号 (株)河原書店 1998.8  
『Museum Works』 Vol.2・3 (株)京都科学 1998.1~7

- 『平安建都1200年記念協会ニュース』 (財)平安建都1200年記念協会 1998.5  
『文化財報』 No.99~102 (財)京都府文化財保護基金 1997.11~1998.8  
『会報』 第84・85号 (財)京都古文化保存協会 1998.1~1998.10  
『志くれてい』 第63~66号 (財)冷泉家時雨亭文庫 1998.1~1998.10  
『丹後杜氏誌』 丹後町教育委員会 1995.3  
『縄文の美』 丹後町古代の里資料館 1998.7  
『加悦町歴史文化シリーズ』 第1集 加悦町教育委員会 1997.3  
『加悦町歴史文化シリーズ』 第2集 同上 1998.3  
『市史編さんだより』 第13・14号 宮津市教育委員会 1998.2~1998.3  
『三和町史 資料編』 三和町 1998.3  
『平成9年度企画展』 第11回 三和町郷土資料館 1997.11  
『福知山市指定文化財図録』 福知山市教育委員会 1997.9  
『史談福智山』 第546~557号 福知山史談会 1997.9~1998.8  
『綾部市遺跡地図』 綾部市教育委員会 1998.3  
『第6回特別展示』 綾部市資料館 1998.7  
『綾部市資料館報 平成7年度』 同上 1997.3  
『綾部市資料館報 平成8年度』 同上 1997.3  
『綾部の文化財』 45~47号 綾部の文化財を守る会 1997.11~1998.10  
『京北の文化財』 京北町文化財を守る会 1998.4  
『第24回企画展』 亀岡市文化資料館 1997.11  
『第25回企画展』 同上 1998.5  
『第26回企画展』 同上 1998.9  
『亀岡市文化資料館報』 第5号 同上 1997.3  
『新修 亀岡市史編さんだより』 第8号 亀岡市史編さん室 1997.11  
『久遠の和』 京都府立亀岡高等学校 1998.3  
『両丹地方史』 第66号 両丹地方史研究者協議会 1997.10  
『平成8年度 (財)向日市埋蔵文化財センター年報 都城9』 (財)向日市埋蔵文化財センター 1998.2  
『史跡長岡宮大極殿跡』 向日市教育委員会 1998.3  
『向日市文化資料館報』 第12号 向日市文化資料館 1997.3  
『向日市文化資料館報』 第13号 同上 1998.3  
『向日市古文書調査報告書』 第6集 同上 1997.3  
『向日市古文書調査報告書』 第7集 同上 1998.6  
『桂川用水と西岡の村々』 同上 1997.11  
『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成8年度』 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1998.3  
『館報』 第4号 大山崎町歴史資料館 1998.3  
『宇治文庫』 9 宇治市歴史資料館 1998.3  
『宇治名所図会』 同上 1998.10  
『文愛協会報』 第47・49号 (財)宇治市文化財愛護協会 1998.2~1998.10  
『展示図録8』 城陽市歴史民俗資料館 1997.11  
『展示図録9』 同上 1998.2  
『展示図録10』 同上 1998.7  
『城陽市歴史民俗資料館館報』 第3号 同上 1998.3  
『展示図録17』 京都府立山城郷土資料館 1997.11  
『企画展資料26』 同上 1998.9  
『山城町歴史シンポジウム』 第2回 山城町・山城町教育委員会 1998.3  
『加茂町史 資料編I』 第四巻 加茂町 1998.5  
『紫陽花』 第27号 加茂町町史編さん室 1997.12  
『波布理曾能』 第15号 精華町の自然と歴史を学ぶ会 1998.4  
『京都考古』 第85号 京都考古刊行会 1997.10  
『地域と環境』 No.1 「地域と環境」研究会 1998.3

## 編集後記

情報70号が完成しましたので、お届けします。

今年の府内の発掘調査で、最もセンセーショナルなものが、巻頭カラー図版に掲載した与謝郡岩滝町大風呂南墳墓群のガラス釦でしょう。発掘後間もないにも関わらず、ご協力いただいた岩滝町教育委員会の皆様に御礼申し上げます。また、恭仁宮北面大垣出土の「東」銘文字瓦、浦入遺跡の丸木舟、下植野南遺跡の抄報、愛宕神社1号墳の中国鏡の再考察など、本号は薄いながらも内容の濃いものとなっています。

どうぞ、ご味読ください。

(編集担当：河野一隆)

## 京都府埋蔵文化財情報 第70号

平成10年12月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社  
〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
Tel (075)441-3155 (代)



KYOTO  
ARCHAEOLOGY CENTER